

翻訳：H. H. ホウベン

『ゲーテのエッカーマン—ある控え目な人間の伝記』（4）

林 久 博

10. 名声への道

1824年夏、エッカーマンがまず向かったのはハノーファーだった。それから三週間後にフランクフルトへと向かった。フランクフルトには6月25日に到着した。ゲーテの故郷で見たものと言えば演劇ばかりだった。大聖堂の塔から外を眺めると、遠くへ行ってみたくなった。遙か遠くの山々、広大な空、それはまさにハノーファーにいるかのようだった！ マイン川はエルベ川のように黄金色に輝き、沢山の橋が架かり、船が行き交う様子はまるでハンブルクのようだった！ しかしフランクフルトに広がっていた草原や大きなクローバー、巨大な果樹、ずっしりとした無毛の雄牛、地域住民の飛び切りの美しさ、そういったものを低地ドイツ農民の息子たるエッカーマンはこれまで見たこともなかった。彼はドイツ連邦議会公使のラインハルト伯爵を訪問した。ゲーテがこの「本当に優れた青年」⁽¹⁾を「私や家族にとっても計り知れない」⁽²⁾人物として推薦していたのだ。またシュロッサー（ゲーテの妹の夫）家でオットーリエと会った。彼女は湯治のためエムスに来ていたのだった。これは彼が望んでいた「活気ある生活」⁽³⁾なのだろうか？ 彼の手紙から判断すれば、フランクフルトではそんな生活は見出せなかったようである。キーゼヴェッターがいてくれたおかげで、ハイデルベルクでは幸福な日々を過ごすことができた。キーゼヴェッターは、歴史家で宮廷顧問官を務めていたシュロッサーや他の人の所にも連れて行ってくれた。それから二人は上部ライン地方を通してシュパイヤーやノイシュタットへ旅行した。7月13日、エッカーマンはマインツに到着し、ライン川を下ってケルンに赴いた。ボンではゲーテの友人ネース・フォン・エーゼンバック教授やダルトン教授を訪問した。それからエムスへ戻ってオットーリエを再訪し、もう一度フランクフルトを訪れた。8月1日、再びワイマルに到着した。最初にゲーテの所へ行くと「これまでよりも愛情を込めて」⁽⁴⁾迎え入れてくれた。

再びゲーテの元にいられる幸福を、エッカーマンは心から感謝していた。しかし彼は二ヶ月間ゲーテから遠ざかり、今ではこれまで以上に正しく自分の状態を見通すようになっていた。ハン

ヒェンの父親は2月に亡くなっていた。母親も病気がちだった。友人達はこう口にした。婚約期間が五年もあるなんてもう十分だよ！ すぐにハンヒェンをワイマルへ連れて来るべきだよ、ゲーテの所でたっぷり物乞いを受けているじゃないか、と。彼はワイマルに来てからというもの、自分の将来のための仕事が全くできなかった。ゲーテの「計り知れない」協力者でしかなかったのだ。この名誉職には時折無料の食事が付くくらいで、生計を立てることなどできなかった。ましてや所帯を構えることなど考えられなかった。ゲーテは性急な行動をしないよう諭した——まずは確実にいくものだよ！と。エッカーマンとリーマーには全集を編集する際の協力者であってほしいし、自分が死んだ場合は編集者であってほしい、とゲーテは5月6日、エッカーマンに胸中を吐露している。だがコッタと契約を結ぶ前に、ゲーテは38の連邦国から海賊版に対する優遇特権を得る必要があった。出版された国以外では、文学作品は保護の対象外だったのだ。優遇特権は版の商業上の価値を著しく高めるものであった。だから政府がこうした認可を急いでいなくても我慢しなくてはならなかった。一方でゲーテは、自分が編集協力者の支払いに際してどれくらいの「費用」が払えるのか、契約を結ぶ前には分からなかった。それ故、この共同作業は軌道に乗らなかったのだろう。1824年9月には一時中断された。

『論集』に対するコッタの報酬をエッカーマンは使い果たしていた。ゲーテは夏の旅行に「100グルデンまで」⁽⁵⁾ 寄付してくれていた。だが、あけすけにゲーテにお金を無心してもらうことなどエッカーマンにはできなかった。この前の年、エッカーマンはグローセに次のように書いている。「ゲーテに何も頼めないのではなくて、ゲーテの好きなようにさせておかないといけないのだ。ゲーテはどんなことでも私の先を行っているのだから。」⁽⁶⁾ 落ち着いた高潔な態度を取って、彼は頑なにこうした考え方に固執した。だがゲーテは彼の先など行ってはいなかった。10月にはエッカーマンは切羽詰まった状況に陥っていた。ハンヒェンは強く疑念を抱き、驚きのあまりこう書いている。「こんなことになるなんて思いもしなかったし、親愛なる善良なゲーテがあなたの面倒を十分見てくれると思っていたのに！」⁽⁷⁾ フィアンセを不安にさせないためにも、お金が足りないとは言えなかった。だが、そうは言ってもお金がなくて、彼の仕事は捗らなかった。一方で、ゲーテが処方し約束してくれる快適さと陽気さが彼には必要だった。ワイマルで何が起きているのか、ハンヒェンには皆目見当がつかなかった。

ハイデルベルクの誠実な友人キーゼヴェッターは、エッカーマンの『論集』を読んで感激してくれた（自分の感動を伝えようと、八枚の四つ折り版と六枚の八折り版からなる手紙をエッカーマンに書いたほどだ！）。それ以来キーゼヴェッターが考えていたのは、エッカーマンがすぐ結婚できるように、どうやって安定したポストを獲得させられるか、ということであった。そこに突然、素晴らしいチャンスが舞い込んできた。とある国際的なロンドンの月刊誌がドイツ文学の専任協力者を探していたのだ。ハイデルベルクで宮廷顧問官を務めていたシュロツサーは問い合わせを受けると、エッカーマンを推薦しようとした。シュロツサーは『論集』を読んでいたし、こ

の著者の人柄から好印象を受けていたのだ。シュロツサーはこうも述べている。もしまだ無名のこの人物が気に入らないのであれば、きつとこの人物が書く最初の記事に、ゲーテが喜んで感じのいい言葉を添えてくれるでしょうし、それどころか共同署名さえしてくれるでしょう、と。この依頼を仲介することができて、キーゼヴェッターは我を忘れんばかりに喜んだ。ロンドンでは近代ドイツ詩と散文に関する定期的な報告が待ち望まれていた。キーゼヴェッターは主役級の役柄を、たちまちこの友人のために独占してしまったのだ。キーゼヴェッターはエッカーマンにこう報告した。君は詩も散文もよく知っているし、月に16頁の原稿で年収1300ターラーを稼げるといわけさ！ 君の幸福はそうやって築かれるのだ。そうなってしまえば、ゲーテだって君がすぐに結婚式を挙げても文句は言えないよ！

キーゼヴェッターの手紙を読んでエッカーマンの目は輝いた。年に1300ターラーももらえるのだ！ そうなったらあらゆる心配事から解放される！ 彼は大急ぎでゲーテの元に駆け付けた。ゲーテはこのロンドンの会社を知っていた。5月にゲーテはこの会社との共同作業に誘われていたのだ。だがその誘いから逃れ、8月には催促もあったものの返事をしていなかった。エッカーマンがキーゼヴェッターの手紙を持って、ゲーテの元に駆け付けたのは突然のことだった。エッカーマンの様子を見て、彼がどれほどこの仕事に就きたいかゲーテは一目で分かった。9月2日と4日の日記でも明らかのように、ゲーテはこの件について熟慮したが、心を決めかねていた。エッカーマンは毎週毎週自分を救ってくれる言葉を待っていた。——だがゲーテは沈黙したままだった。何か別の方法で、エッカーマンにお金を工面してやれないだろうか、ゲーテはずっとそのことを考えていた。ゲーテは9月15日、計画中の『論集』第二巻を書くようエッカーマンに促した。ゲーテはそれをコッタが引き受けてくれるのではないかと考えていた。ところが、1823年7月時点でエッカーマンはゲーテの主要作品に関する評論を書こうとしていたものの、『ゲッツ』に関するいくつかの注釈以外何もできていなかった。また『芸術と古代』に提供した二三の短い批評では、紙面を満たすこともできなかった。だから彼は『論集』第二巻に取り組みざるを得ず、また実際にそうしたのだ。1824年10月には「客観的真實について」という長い批評論文を執筆し、11月末にゲーテにチェックしてもらった。28日にはエッカーマンはゲーテと「論文集のためにどのような配慮が必要か」⁽⁸⁾ 話し合っている。12月4日、シュテュークリッツに書いているように、エッカーマンは「新しい本に真面目に」⁽⁹⁾ 取り組んだ。それ以降、このことに関して何も語られていない。

そうこうするうちに、これまでよりも好条件で、すぐに収入が得られるチャンスが訪れた。9月19日、ゲーテの家で「当地に滞在しているイギリス人達」⁽¹⁰⁾ のための朝食会が催された。その際、寄宿学校の所有者であるメロス教授がイギリス人生徒用のドイツ語教師を探している、ということが話題となった。これはエッカーマンのためのポストではないだろうか——もしそうならば教えながら同時に学ぶことができ、時給で12グロッシェンの銀貨がもらえ、若いイギリス人達と仲

良くなって、彼らの言語も身に付けられるではないか。英語の勉強はもう一年前から計画していたことだった。一石二鳥とはこのことだ！ 10月13日、ゲーテはエッカーマンと「メロス教授の申し出について」⁽¹¹⁾話し合っている。15日、メロス教授はこれに合わせて寮母も受け入れることにして、28日にはすべての準備が整った。ゲーテはエッカーマンに最上のポストを与えることができたと思っていた。もしメロス教授がゲーテの家に招待されなかったら、寄宿学校では昼も夜もエッカーマンのためのテーブルは覆われたままだっただろう。社交の席で提案してもらえたおかげで、新しいポストが手に入ったのだ。こうしてエッカーマンはイギリス国民について、ますますゲーテと話し合うようになっていった。話題はゲーテには無尽蔵にあって、パイロンからその他のお気に入りのイギリス人にまで及んだ。寄宿生は11月には次々に入寮していった。エッカーマンは案内役を務めた。悲惨な状態にあった彼は、どんなわずかな報酬であっても我慢しなければならなかった。こうして彼は、自分には「相応しく」ないが、恐らく一時的なものに過ぎないこの環境に適応していった。10月31日のオットーリエの誕生日には辛辣で気の利いた詩を書いて、イギリスやスコットランドの祝賀客を分析して見せることもあった。

一方、「ハイデルベルクの提案」⁽¹²⁾はエッカーマンの頭から離れることはなかった。キーゼヴェッターはなぜ返事がもらえないか分からず、11月末には返事を書くよう促している。その際、キーゼヴェッターは彼に一つのお願いをしている。自分はクリスマスにハノーファーへ帰るつもりだが懐が寂しい——まもなく光り輝く収入を手に入れるだろう友人が、自分をピンチから救ってくれないだろうか、と。11月29日の（これまでは知られていなかった）エッカーマンの返事は、あからさまに彼の状態と気分を映し出している。彼は次のように報告している。「私はユダヤ人と弁護士の本所に行ってきた。どちらも承諾してくれようとしなかった。私の善良な名前よりも、忌まわしいお金の方が尊重されている、そんな経験をしなくてはならなかった。人が望むのは安心なのだ——自分の担保を提示しても、私がそれを行使できない人物だと、奴らは自分のやり方で灰めかしてくる。私は心を痛めている、親友よ！ 君を助けてやれる状況ではないのだ。あらゆる不幸からなんとか解放されて、やっとハノーファーに帰れたとしてもね。金銭的な窮乏を私より理解している人は、おそらく誰もいないだろう。私はまだ毎日のように金欠状態と戦わなくてはならないのだから。」このような告白をしなければならず、彼はとても腹立たしかった。だからすぐにロンドンの提案を思い切って受け入れることにしたのだ！ 彼は次のように説明している。「立派なシュロッサーに心からの感謝を伝えてほしい。私はすぐに仕事に取り掛かって、出たばかりの新しいゲーテの『ヴェルター』について書くつもりだ。あのイギリスの雑誌が私を救ってくれますように！ こんな幸運に巡り会えたのは君のおかげだ。ゲーテが深入りして邪魔をしなればね。君に両親がいて、孤児として生まれてこなかったのはありがたいことだよ。いくら孤児が誠実そうな顔をしていても、こんにち一文の価値もないのだから！」

もちろんゲーテの了解がなければ、エッカーマンは何もすることができなかった。だが12月3

日に、自分がロンドンの雑誌に協力し、少なくとも近代の散文に関する批評を引き受けたいと告白した時、ゲーテは顔を歪めたのだった。『対話』によれば、ゲーテの顔は「これまで親しげだったが不機嫌になり、彼の表情の動きの一つ一つを見ると、私の計画に同意できないのが分かった。」⁽¹³⁾ゲーテは極めて悲観的にこの仕事の労苦を描き出して見せた。つまり、どれほど役に立たないものを勉強して読まなければならないかとか、E・T・A・ホフマンや「クラウレンやその同時代人」も読み通さねばならないか語ってみせたのだ。もし「世の中を全部敵に回して戦い」⁽¹⁴⁾たくないなら、良くないものであってもそれを言うてはならないのだよ、と。それは「君の進路には」相応しくないし、散漫にならないように注意して、英語やイギリス文学の勉強に留まって、決して使い尽くすことのできない「資本」⁽¹⁵⁾を作ることだ、とも。「あなたに何の成果にもならぬことや、あなたに相応しくないことは、すべて放棄してしまいなさい。」⁽¹⁶⁾

なぜ芸芸批評がエッカーマンには「相応しく」ないのだろうか？ こうした観点が「必要不可欠」とゲーテはよく彼に言っていたし、ゲーテ自身が急ぎ立てた論文集だって、ゲーテの著作のみ論じるものではなかったはずだ！ エッカーマンはこれにどう答えたのだろうか？ 彼の勇氣は一かたまりの灰のように消え去ってしまい、一言も言い返せなかった。だが彼はようやくゲーテを「促して話させる」⁽¹⁷⁾（これは『対話』に忠実に従った言い回しである）ことができ、ともかく嬉しかった。彼は「気分もすっかり落ち着いて、何事もゲーテの忠告に従って行動しようと決めた」⁽¹⁸⁾のだった！ ほとんど情熱的と言ってもいいほどに、ゲーテは長々とエッカーマンに論じて聞かせた。これは、協力者を失ってしまうかもしれないという見通しが、どれほどゲーテを不安にさせたかを示すものである。ゲーテの不機嫌は12月3日の日記にもまだ余韻を残している。「エッカーマンはヨーロッパの雑誌に協力するつもりだと言っている。」⁽¹⁹⁾自分に従順な若者のことをゲーテは如何に見抜いていたことか！ ゲーテは穏やかなメフィストの笑顔で微笑みながら、すぐに攻勢に転じたのだ。二三日後に断りの返事を出したことを聞いて、ゲーテは堰を切ったようにしゃべり出した。「あなたがまた自由になって落ち着いていられるのはありがたいことだね。」⁽²⁰⁾ゲーテはエッカーマンでもないのに、よくもこんなことが言えたものだろう！ それから間髪入れず次のような警告もした。「作曲家連中がやって来てオペラをやりたいと言ってくるだろうが、その時も今度と同じように毅然と断ってしないなさい。これもまた何のためにもならないことだし、時間を浪費するだけの話だからね。」⁽²¹⁾ 実際エッカーマンは、当時、ハノーファーで音楽監督をしていた友人ニコラにオペラの台本を書くことと約束していた。こうしてエッカーマンは、ゲーテによって心の重荷を取り除かれていったのだ！

エッカーマンの辞退を聞いてキーゼヴェッターは呆気にとられてしまった。善良なハンヒェンは最近では一度遠慮がちに「市民的な生活」を望んでいると仄めかすこともあったが、やがて英国風の空中楼阁を描くのをやめてしまい、エッカーマンと「誠実な助言者」たるゲーテを完全に信頼することにしたのだった。ただ彼女はこう述べている。「もし、あなたがこのハノーファーで

どうかして暮らしていけるのなら、その方が私を幸せにしてくれることでしょう。」確かにゲーテの言う通り、広範囲に及ぶ批評活動に関して、エッカーマンには新しい文学の知識が不足していた。ただエッカーマンだってきつとすぐに経験を積んでいこうし、彼の自己認識にとっても得るところが大きいのではないだろうか。また、他の人が書くものを見たっていいのではないだろうか。彼が突如決心してイギリスの申し出を受諾した場合——最初のテーマは何になるはずだったのだろうか？ それは出たばかりの『ヴェルター』の新版だろう！ エッカーマンは文学的に偏った読書傾向を持っていたので、完全に同時代文学との結び付きを失っていた。彼はこれまでに当時の文学作品についていくつか文章を書いてきたが、その際注意が払われていたのは大抵の場合、訂正や予防的な説明によって師匠の味方をする事だった。このように、彼はここでもゲーテを越えて先へ進めないでいたのである。その一方、ゲーテ自身は他に仕事がなくとも、今取り組んでいる仕事を絶対に途中で投げ出すことはなかった。エッカーマン自身がこうした大袈裟なプロ根性を悟ったのは、ずっと後になってからのことである。なぜなら巨人の陰に隠れていれば、差し当たり気分良くいられるからである。ゲーテの邸宅での彼の地位にも注意が払われていた。『論集』は正真正銘の、いやそれどころか熱狂的な崇拜者を獲得していた。彼はすでにいくらか文学界で認められる存在だったのだ。若い作家達にとって彼は仲介者であり、自分達が承認される希望は彼の手に乗せられていた。シュテュークリッツは、オリンポスの住人たるゲーテへの不信の念さえ彼に打ち明けていた。あの有名なルートヴィヒ・ティークが「ゲーテによろしくお伝え下さい」と伝えることができたのは、一体誰のおかげだろう？ エッカーマンである！ 人々は彼に愛されることを望み、彼の発する一言一言が、より高い所からなされる判断の反響と見なされた。彼の詩も積極的に過大評価された。こうして彼は、将来の古典主義作家という役割に慣れ親しんでしまった。ゲーテの仄めかしに背中を押され、ゲーテとシラーの友情の中に一つの先例めいたものを見出すようになっていたのだ。いつの日か、そしてどうかして、彼が名声への道を見出す日が来るのだろうか！

だが、エッカーマンが市民的な生活を送れる可能性をワイマル以外で見つけたとしたら、ゲーテは一体どうするのだろうか？ 二ヶ月後、こうした事態が実際に起こった。ハノーファーの国立文書館のポストが空きそうだったのだ。300ターラーの給与だったが仕事もほとんどなく、エッカーマンには打ってつけだった。彼は以前からその仕事を得られればと考えていた。ハンヒェンと将来の義兄弟が興奮しても無理もないことである。エッカーマンは怠りなく支援者を総動員した。ゲーテにはハノーファーに影響力のある崇拜者がいた——もしその人物がエッカーマンのために尽力してくれたら、すべてがうまくいく！ 1825年2月13日、エッカーマンはゲーテに「ハノーファーでの計画」⁽²²⁾を伝えた。エッカーマンはゲーテの返事をフィアンセに喜んで報告している。「私があなたのことをどれほど好きで、そばに置いておきたいと思っているか、あなたも御存知でしょう——ですが、今後あなたが幸せになるのであれば、喜んであなたのいない不自由に

耐えるつもりです。』⁽²³⁾ゲーテはこうも言っている。このワイマルであなたを雇うのは私と大公の年齢では難しい、と。「だからもしそのポストが空くような場合には、あなたがそのポストを得て面倒見てもらえるよう何でもやってみるつもりです。こんなに相応しい機会は簡単にはやって来ませんから。』⁽²⁴⁾

このポストは二週間後に空いた。2月27日、エッカーマンはそれをゲーテに報告し、28日には「ハノーファー案件」⁽²⁵⁾に取り掛かった。それ以降、ゲーテの日記はエッカーマンの関心事について沈黙している。約束していた推薦状は一通も書かれなかった！ゲーテがエッカーマンを推薦しないというのは何とも奇妙だな、とハノーファーで噂となった。結局、他の人がこのポストに就くことになった。旧姓レーベルク内閣顧問官夫人がエッカーマンに「心からの手紙」⁽²⁶⁾を書いたが、結局、次のような名案を出してくれただけだった。つまり、名家の家庭教師としてハノーファーに戻って来るか、それともフリーの作家として何か職が見つかるまで待ち続けるか、というものであった。いずれにしても、夫人は自分の住むリンデン城に部屋を提供してくれるということだった。エッカーマンはすでにメロスの所で家庭教師をしていたし、ワイマルで待ち続けるより、それは快適で名誉なことだった。ゲーテはエッカーマンに善意ある心のこもった言葉をかけてくれた。だが、有能な協力者が今後も協力してくれるにしても、自分から離れていってしまうことにゲーテは心を決めかねていた。ゲーテが正しかったことが、今後の展開からも明らかである。つまり、エッカーマンが文書館の小役人をしていたら、自分の人生を描いてみようという機会も訪れなかつたらうし、『ゲーテとの対話』が語られることも話されることもなかつたらう。――

3月末、エッカーマンは失意からすっかり回復した。彼は幸せでさえあった。ゲーテが海賊版に対する出版優遇特権を得て、コッタが作品集の新版に高額の支払いをするということは今や確実なこととなっていた。それ故、編集は急いで進められた。では、誰が手伝わなくてはならないだろう？エッカーマン以外に誰がしよう！そのためにゲーテは彼に「現金によって感謝の気持ち伝える」⁽²⁷⁾だけでなく、彼の「新しい本」⁽²⁸⁾の手伝いをして、「自分の原稿」⁽²⁹⁾を彼に委ねることさえ約束したのだった。すべてが再び薔薇色の光の中で輝き出した。エッカーマンの状態は、3月27日に断言しているように、総じて「極めて手堅いもの」⁽³⁰⁾となった。事態が新しい方向に動き出したことにハンヒェンも満足していた。

それにしても「新しい本」とは一体何のことだろうか？原稿がまだ揃っていない論文集のことだろうか？それとも別の計画が突如浮上してきたのだろうか？3月22日、ワイマルの劇場が焼失した。だからエッカーマンには時間がたっぷりあって、自分が書いた日記の中からゲーテとの対話を書き写すことに熱中した。ゲーテ自身でさえそれに関わった。つまり4月4日、ゲーテは「エッカーマンによって伝えられる会話の準備」⁽³¹⁾をしているのである。また5月24日には、ゲーテはこれまでに完成した分の原稿を「通読して吟味」⁽³²⁾した。6月5日にはもう一度それに取り

組んだ。それ以降、ゲーテの日記は突如としてこのことに沈黙している。5月30日、エッカーマンは、自分とゲーテの共通の友人であるネース・フォン・エゼンバックにその本を秋に出版することを切り出し、期待できる謝礼を持ち出して、彼に比較的多額の借金を申し込んだ。6月6日、エッカーマンはハンヒェンに手紙を書いた。ゲーテがこの仕事を素晴らしいものと思ってくれること、それがきつと自分の幸せとなり、ドイツ、イギリス、フランスで自分を有名にしてくれること、一方でそれがゆっくりとしか進まないこと、などである。エッカーマンは『対話』の中から取り出した比較的長めの文章を自分の批評論文と合体させ、さらにゲーテの未発表の諸論文と組み合わせることによって、それをより魅力的なものにしようとしていたのだろうか？ 6月2日、ゲーテは息子と「エッカーマン案件」⁽³³⁾についてじっくり考え、次の結論に達した。つまり、自分の原稿を独立した形でエッカーマンに編集させるのは新しい全集とは相容れず、対話録を印刷された形で目に見えるようにするのは自分の意に沿わない、ということである。これを許してしまえば、他の人に対しても容易に無思慮な出版へと導いてしまう恐れがあった。対話録は内容から判断しても、早まって浪費され断片に留まってしまうには、あまりにも価値のあるものだった。そこに隠されていたのは、数年もすれば磨き上げられて完成する本のための材料だったのである。またしてもゲーテの方が正しかった。毎日提供される精神的な富から多くの成果を引き出すには、エッカーマンはまだまだ役不足だったのである。ゲーテという存在やその考え方、そしてその人生の中にどれくらいのものがあるか、彼にはまだよく分かっていなかったし、明確ではなかった。11年後に世界の人々を驚かせたように、ゲーテという問題の全てを、精神的にも芸術的にも完全な形で描き出して作り直すには、1825年はまだ早すぎたのである。――

エッカーマンはネース・フォン・エゼンバックに借金を申し込んだものの断られていた。それは、ゲーテ作品集の編集作業にかなり時間をかけていたにも関わらず、相変わらず彼がみじめな状態であったことを示すものである。新しい本が秋に出版できないことで、彼はひどく落ち込んでしまった。キーゼヴェッターは依然として善良な天使の役割を演じ、彼をロイス侯爵の家庭教師にしようとしていた。下宿付きで1000グルデンの給与もあった！ エッカーマンは彼の好きなようにさせた。自分から申し出るのはプライドが許さなかった。エッカーマンは無名の候補者ではなかったし、ワイマルの社交界で彼の詩は朗読され、彼の書いた歌が歌われていた。彼と知り合いになろうと見知らぬ人達が集まったほどだ。すぐに結婚できるのであれば、彼はそのポストを受け入れるつもりだった。

ハンヒェンに関して言えば、彼女とはややこしい状況にあった。5月2日、彼女は母親を亡くし、秋には兄のいるブレッケーデに引っ越さなければならなかった。ワイマルには勤め口の見込みはなく、まだ「身分に相応しく」暮らさねばならなかったので、「慌てて結婚し」ないようゲーテが忠告していたが、そのゲーテの忠告を彼女に隠しておけなくなっていたのだ。自分の憧れがいつかは実現すると約束して、彼はただフィアンセに辛い現実を忘れさせた。彼が一番望んだの

は、再び孤独の中に引きこもって、自分の中に蓄積していた「充実した中身」⁽³⁴⁾を新しい本へ流し込むことだった。ワイマルではそのための時間や安らぎも見出せなかった。「貧乏であることが私の不幸なのです」と彼は8月18日に嘆いている。「私の人生の最上の月日が、貧乏の上を滑り去って行きます。私はその月日の中で、もっと良い境遇で、全く別の成果を引き出したかったのです。」⁽³⁵⁾だがゲーテから離れるという考えには——フィアンセへの手紙では何度もそう考えていた——同調できなかった。ハンヒェンが次第に不信感を募らせてゲーテを疑い始めている時でさえ、彼は悪口を言わせなかった。ポケットの中に少しお金を見つけると——「ゲーテからもお金を」(1825年7月28日)もっていた——彼はすべてを光と太陽の中で見た。そして社会的な成功や楽しみ、9月に催される大公の記念祝典、「心を晴れやかにしてくれて、しかも自分のためになる」イギリス人達との交友関係を上機嫌に報告して、ハンヒェンを喜ばせようとした。やがてハンヒェンは「すぐに結婚できるようにゲーテは何も取り計らってくれない」と言って疑いの目を向けるようになり、不機嫌になっていった。しかし彼女は私利私欲を捨て、彼が自分の仕事だけに時間を取れるよう、本来は自分が借りるつもりだったお金を彼に渡すのだった。彼女は、ワイマルでの彼の輝かしい立場を過小評価していなかった。だが、更なる成果が何も得られないとなると、結婚も考えられなくなってしまう！ 大公国には多額の借金があるので、エッカーマンのために何も継続的なことをしてやれないのを、8月18日、またしてもゲーテは心から残念がった。エッカーマンはどうやら依然として報酬を節約して使っていた。ありがたいことに他の出版希望者が購入金額をつり上げてくれた後でようやく、ゲーテ全集出版に関する契約が、1826年2月、コッタとの間で成立した。ところが、ゲーテはエッカーマンに向かって「ハノーファーへ帰るのは決してお勧めできない」⁽³⁶⁾と言い聞かせたのだった。

エッカーマン以外にこれを聞いて喜んだ人がいただろうか！ たとえ今の時点で、または将来になって、ゲーテに不満を抱き、彼の元を去ろうと思うことが何度あったとしても、それはエッカーマンには非現実的でありえないことだったからである！ 『対話』を仕上げることは、確かにすっかり先延ばしになっていた。新しいことがあまりに沢山毎日のように押し寄せてきたので、彼が絶望して勇気をなくしてしまうことも度々だった。一方で、彼はますます精神的に豊かになっていった。1825年9月8日のハンヒェンに宛てた手紙の中で「対話録はその価値において匹敵するものではありません」⁽³⁷⁾と述べている。この本が必ず成功すると予感していたのだ。「きっとすぐに二三千部は販売されるでしょう。なぜなら、それは学者のためだけでなく、すべての教養ある男性や女性に向けられた本だからです。そして誰もがゲーテ全集を補うものとして手にすることでしょう。」⁽³⁸⁾ワイマルから遠く離れた静かな孤独の中に身を置いて、孤独と一体になって生み出される私の文学は、きっと後世に残るものとなるでしょう、そうエッカーマンは信用しきったハンヒェンに折に触れて嬉々として語って見せた。そうは言っても、結局これ以降明らかになっていくのは、彼の書く本がゲーテ作品集の付属物であって、彼の名声への道はひたすらゲーテを

通過して続いていく、ということであった。ゲーテと「彼を通じて手に入れる」⁽³⁹⁾文化は、何度逆らおうとしてもエッカーマンを引き付けてしまう強力な磁石なのであった。

11. イェーナ大学からの学位

子供の頃、エッカーマンはヴィンゼンで牛飼いをしていた。父親は貧しい行商人で、母親は羊毛を紡いでなんとか家計をやり繰りしていた。それが今では、二年前からワイマルの大詩人であり国務大臣を務めるゲーテの家に入りやすくなっていった。どんな時に訪れても、エッカーマンはゲーテが優しい言葉と新しい仕事、一皿のスープ、それにグラスワインを用意してくれる数少ない人物の一人であった。世界各地から著名な人物が集まって、昼食の席で重大な問題について話し合うことがよくあった。そんな時でも、ハノーファー近郊からやって来た地味なエッカーマンは、大臣や枢密顧問官、伯爵夫人、宮廷顧問官、大学教授に挟まれながら、かなり定期的にこうした集まりに同席した。事情を知らないこの余所者は、身一つの、どんな称号も持たない人物であった。だから彼は「この人はきっと例外的に食卓に引っ張り出された詩人の私設秘書なのだろう」と思われているようで、その場で震えあがっていた。——もちろん、その他の博識あるゲーテの文献学者でさえ、しばらくそのような思い違いをされていたのだが。エッカーマンは勲章を胸に付けた煌びやかなグループの中の黒い点であったが、まもなくホストたるゲーテにも差し障りのあるものとなってきた。確かにゲーテは取巻きの序列争いを予防するために、彼に高い位を与えはしなかった。ゲーテの力はそこまで及んではいなかったのだ。だがゲーテは独断で彼に博士の学位を与えた。1824年2月1日、ゲーテは日記の中で彼を初めて「エッカーマン博士」⁽⁴⁰⁾と呼んで、まもなくこの称号で呼ぶことがゲーテの習慣となった。臆病で口数の少ない夢想的なエッカーマンは称号というイチジクの葉を得て、今や全くの別人となっていった。

だがゲーテの独断で学位をもらっても、エッカーマンが気まずく感じたのは当然のことかもしれない。エッカーマンは有能な人物であったので、ゲーテは彼をできるだけ早く正式な博士にすることが絶対に必要だと考えていた。そのために必要なのは大学以外の何ものでもないが、ゲーテの手元にはイェーナ大学があった。当地の大学運営は、主に彼の大臣としての「監督」業務の一つだった。しかしイェーナ大学哲学部の教授達は厳格者ばかりで、ゲーテに「好意」を抱いていなかった。だからゲーテは個人的な友人に即座に栄誉を与えてもらえるよう、異例なことは少しもなかったにも関わらず、教授達に対して慎重かつ礼儀正しく振舞った。博士号請求論文や口頭試問は比較的小さな大学では必ずしも要求されていなかったし、少なくとも六学期間の在学規定もまだなかった。学術書を出版し、それが学位に値すると思われる者は、博士号を授与されるよう、最も良い結果を期待できる大学にそれを提出することになっていた。イェーナはそのことに非常に寛容だった。10年後にも比較的多くの「若きドイツ」の作家達がイェーナで学位を取得

した。ベルリンのカール・グツコウはまだラテン語で書いた博士号請求論文を提出していたが、その一方で、シュプレータウのハインリヒ・ラウベは処女作『新世紀』をイエーナ大学に提出することに甘んじていた。その本は学術的というよりはむしろ娯楽的で、プロイセンでは即座に発禁処分となり、ラウベを一年間の禁固刑としたものだった！ どれほどイエーナが寛大であったかは、ゲーテと極めて親しかった古典文献学者ゲットリングの賛意から見て取れる。ゲットリングはこの学部での博士号授与に関する書類が回覧された時、ラウベから送付されたラテン語の履歴書の余白に非常に学術的でない言葉を書き込んでいる。「ラウベ氏は粗悪なラテン語を書いているが、ドイツ語はよく書けている。私は賛成します。」⁽⁴¹⁾

さて、なぜエッカーマンは最初の散文作品である『論集』を提出して、イエーナに戦いを挑むよう言われなかったのだろうか？ 『論集』の出来は抜群で、自分の力で成し遂げた立派な頭脳労働の成果だった。だがゲーテが重視していたのは、そのような審査方法が個人的な副官による引き立てと見なされて、エッカーマンの不利益にならないようにすることだった。ゲーテは相応しい機会が訪れるのを待っていた。比較的多くの学位がイエーナから授与してもらえる、そんな機会を。ゲーテはエッカーマンと随分前からこのことについて話し合っていた。1825年7月、フィアンセももどかしい思いをしながら、約束された栄誉の到来を待ち焦がれていた。その機会が訪れたのは、この年の11月のことだった。ワイマルはカール・アウグスト大公による統治50周年を祝う記念祝典の辛労からようやく回復し、大公の友人たる詩人ゲーテの長期在職を盛大に祝う準備をしていた。

この記念すべき日に、ゲーテは二つの博士号を与えてほしいとイエーナ大学に頼んだ。極めて積極的な二人の協力者にそれを与えたかったのだ。一人はギムナジウム教師としてすでに教授の称号を持っていたリーマー、もう一人はエッカーマンのためのものだった。この夏ゲーテは、エッカーマンに対する好意溢れる計画を法務長官フォン・ミュラーに打ち明けた。つまり、フォン・ミュラーに仲介者になってもらい、何をすればよいかエッカーマンに伝えてほしいと9月24日に頼んだのだ。エッカーマンは履歴書を学部提出すればよかったので、10月24日、非常に簡素な書類を書く義務を引き受けた。この書類で『論集』についてしかるべく言及したが、1821年の『詩集』という小冊子のことは隠しておいた。いずれにしても、そのようなへぼ詩人ぶりが学識ある紳士達に悪い印象を与えるかもしれない、と恐れていたことだろう。

博士の学位記は予定通り到着した。ひょっとしたら忘れられているかもしれない、とハンヒェンは不安に思っていたが、そうはならなかった。11月7日の日付が記されていた。ゲーテはこの記念すべき日に、顔を真っ赤にしたエッカーマンに直接学位記を手渡した。そこには「赤と金色の封蝋印」⁽⁴²⁾が施されていた。

ただこの博士号授与はイエーナではそれほどスムーズにはいかなかった。エッカーマンに関するゲーテの願いは学部の何名かの抵抗にあっていた。だがそれを大学事務局長フォン・モッツが

黙殺した。

それと同じように、エッカーマンも学位記をカバンにしまい込んでしまったので、「博士」と称号で呼ばれても、もう目を伏せる必要もなかった。彼は自分に与えられた榮譽にほとんど関心を示さなかった。というのも、責任の重いお返しをしなくてはならなかったからである。大公の記念祝典でこの小国全体が興奮状態に陥り、数えきれないほどの祝辞や説教、歌やカンタータ、プロローグやエピローグを作って、人々は自分の思いを発散していた。エッカーマンもささやかながら、教会の式典用にカンタータを作ってみせた。また、ある朴訥な靴職人が、自ら作った金糸の縫い取りのあるペアの靴を愛する君主に奉呈する際、通訳さえした。靴職人のわざとらしいほど無邪気な詩句は、新聞や雑誌を通じて世間に知られることとなった。ゲーテの記念祝典にも、エッカーマンは多大なる詩的な出費を払うことになった。エッカーマンが書いた機会詩の中で最上のもは「ゲーテの『イフィゲニエ』の上演の後」であるが、奇妙なことに1838年の第二詩集には収録されなかった。

こうした状況の中で文芸の女神達の苛立ちは募り、陰険な方法で返しをしてきた。犠牲となったのは善良なエッカーマンだった。大公が受けた榮譽に忠実な家臣達は皆喜び、「青銅より耐久性のある」文学的記念碑を建てようという要望が沸き起こった。つまり、ワイマルから大公国の隅々に至るまで、記念祝典の様子をすべて詳細に記述し、演説や詩、そしてそれ以外の文学作品もひっくるめて印刷することになったのだ。こうして、これまで印刷された中で最もひどい本の一つが誕生した。それはずしりと重い二巻本で、色褪せしない紙と赤みがかかった金色の表紙は桁違いに価値あるものだった。『1825年9月3日のワイマルの記念祝典』である。もちろん宮廷が印刷費用を負担した。そのような作業にはいつも進んで仕事を引き受ける法務長官フォン・ミュラーが、名誉職として編集を担当することになった。だが資料収集や原稿整理、清書、校正という仕事は、博士になりたてのエッカーマンに押し付けられた。こうした無理な要求から逃れることなどできなかった。「法務長官フォン・ミュラーとゲーテもいくつか手伝ってくれました。」⁽⁴³⁾1825年12月2日に第一巻が幸運にも完成した時、エッカーマンはハンヒェンにこう報告している。だが第二巻には冬中かかってしまい、「この忌々しい祝祭の説明文」⁽⁴⁴⁾に「気が狂いそうに」⁽⁴⁵⁾なって、依頼主に何度も突き返してしまいそうになった。だが彼には一つの願いがあったので、最後まで頑張り通した。その願いとは、この本を仕上げた自分のことを大公に推薦し、場合によっては後々ワイマルで職を与えてもらえるよう考慮してもらうことであり、また自分の苦悩を何度も訴えているゲーテに仕え、どうしても必要なまとまった額の報酬を受け取る、ということだった。しかしこの辛い仕事がようやく終わりを迎えても、この本があらゆる角度から拾い集められた文学的ゴミくずであることに変わりなく、彼にへりくだる人々でさえ驚愕させてしまった。結局、この本は顧みられることなく、大公の官立書庫と図書館の書架の中に姿を消していった。希望を抱いていたからこそ、真の編集者たるエッカーマンは絶望しながらも、こんな長期間の仕事にも

耐えてきた。だが、彼の願いは一つも叶えられなかった。大臣が約束してくれた現金報酬でさえ支払いが滞った。

一方ハノーファーの故郷では、エッカーマン博士は成功者と見なされていた。だからなぜ彼がすぐに所帯を構えず、フィアンセを迎えに来ないのか、故郷の人達は理解できないでいた。彼が何に悩んでいるか分かっていたのはハンヒェンだけだった。知人友人からお祝いの手紙も沢山もらった。子供の出世を望む母親が、怠惰な子供に輝かしい模範を見せようとする時には、ハノーファーではエッカーマン博士の名前が挙げられるほどだった。

12. 巨匠の生徒であり友人として

1825年の秋にはワイマルで記念祝典があり、その記念誌を引き受けるという厄介な仕事があった。だからエッカーマンはゲーテのために仕事ができずにいた。ほとんど一年半の間、彼の活動は停止した。だが彼は、依然としてゲーテの元に出入りしていた。エッカーマンの『対話』には、ゲーテとどのように時を過ごしたかが記されている。またそれは、しばしば素っ気ない書き方をするゲーテの日記にも記録されている。最初の二年間は、ゲーテの日記にはほんの数回だけ、エッカーマンとの会話について述べられている。一方でゲーテは、編集に関する対話やエッカーマンが借りていった原稿について入念に記録している。1825年秋、状況は激変した。ゲーテは若き友人との会話の内容を、定期的に短いキーワードで書き留めていくようになった。1827年初め、共同の編集作業が再開すると、純粹に仕事に関することだけが改めて話し合われたわけではなかった。——仕事を手早く済ませる一方、ありふれた会話の内容が非常に詳しく記録されるようになった。エッカーマンは色彩論を自宅で研究し、ゲーテとの実験や議論を通じてこの学問に精通していったが、ゲーテの日記によれば、1827年には少なくとも18回、実際はそれ以上、二人は色彩論について話し合っている。2月18日、ゲーテは「プリズム実験」⁽⁴⁶⁾の準備をしているが、それは生徒に講義する授業のようであった。

二人の関係は今ではこのように構築されていた。つまり、エッカーマンはゲーテの全思考世界に入り込み、将来それを的確に報告することが期待されるようになったのだ。彼はもはや単なる腕の良い協力者ではなかった。作品集やその他の文学的遺産を、将来、編集する人物にとどまらなかった。それと同時に『対話』の著者であったのだ。ひょっとしたら、いつの日かゲーテの伝記作家となりうる存在だったのだ。二人の会話は、いつも些細なことであっても伝記の一部だった。ゲーテの『詩と真実』第四部はまだ萌芽段階にあった。ゲーテは敢えてワイマルへ赴く年について、自伝を書き進めようとしなかった。1822年には突如、伝記的な年代一覧、つまり『年代記』もストップした。クロイターによって書類の整理を終えた1823年には、まだその続きを「伝記的年代記の成立」という論文で書くと明言していたのだが、こうした自伝的著作を中断したのは、

おそらく偶然のことではない。1823年以降、エッカーマンの手記がその代理となったのだ。ゲーテが知る限り、それは後を埋め合わせる、一時しのぎ以上のものとなる可能性があった。ゲーテは今ではこれらの会話を新しい観点から見るようになっていた。つまり、後世に伝承され、永続的な価値を持つという観点からである。こうした観点があったからこそ、二人の今後の交流にはより大きな意味や、これまでとは違った内容や形式が与えられていくのである。エッカーマンが後に好んで、そして当然のこととして強調したように、彼は今ではゲーテの生徒から友人になっていったのであり、当時思われていたよりもずっと深い意味で、1823年9月のイェーナでの約束が叶えられたのである。つまり、「あなたにはとりわけ最上のものを手にしてほしい」⁽⁴⁷⁾ということである。ゲーテは気取ってそう言っているわけではないが、自分の言葉を書き留めてくれる人物を目の前にしている、という意識に取り憑かれたのだった。ゲーテは全くありのままに、世間が自分のことを知らないかのように振舞い、エッカーマンの感性と考え抜く理解力、それに洗練された感覚を確かめた。こうして今では、ゲーテにとってエッカーマンは、自分を世間に広めてくれる全権委任者となっていくのである。つまり、ゲーテがこれまで心に秘めておいたことの全てを伝える伝声管となっていくのだ。それ故ゲーテは、エッカーマンの発展や創作、内面生活の全てに遠慮なく関与して、この卓越した若者が書く手記の価値を高めようとした。ゲーテが十分に自覚していたのは、エッカーマンといる時には自らが極めて生産的であり、また自分が発信する人で、エッカーマンが受信する人であること、それに自分の言葉が遠い将来にも響き渡るようにする、ということであった。静かに笑みを浮かべながらゲーテが期待したのは、エッカーマンや後世の人々に、自分が伝えることのできる最上のものを与え、黄金の雨が絶え間なく降り注ぐことであった。

こうした方法を取れば自ずと明らかになってくるのは、対話録をすぐに書き上げるのは不可能で、その本に相応しい有機的な結末を迎えるには、まだまだ年月が必要である、ということだった。その本はある種の文学的な遺産として、ゲーテが後世に自分のことを伝えられる最後の、そして最上の総括として世に出てほしかったのだ。エッカーマンはこの遺産を世に出す役を務めることになった。ゲーテは対話という魅力的な魔法を行使して、自らが関心を寄せる途轍もない領域へとエッカーマンを引き寄せていき、彼を計画的に引き留めておいた。こうしてエッカーマンは、無目的であるがゆえに危険なものともなりうる道へと引き込まれていったのである。だがその一方で、ゲーテは鋭く人間を理解していたので、大きすぎず楽しくない課題から彼を守る術を心得ていた。彼が再び自由の身になれるのはゲーテの死後のことだった。それは決して遠い出来事ではない。

この友情を通じてエッカーマンが手にしたものは計り知れなかった。だが彼は、ゲーテのために何も持ち合わせていないわけではなかった。1826年のゲーテの日記には、それを指し示す最初の言及がある。この友情という秘密帳簿の中にエッカーマンのことも沢山記入されているが、そ

れは彼がゲーテのためにやってあげたことだった。12月6日の日記にはこうある。「エッカーマン博士と食卓。自伝の第四部を書き上げてほしい、としつこく言ってきた。手元にあるものを以前読んだことがあったのだ。」⁽⁴⁸⁾ これは沢山ある中のほんの一つの事例である。エッカーマンも『対話』の中でそれを仄めかしているが、全くの事実である。だが全てが語られているわけではない。彼が受けた最高の栄誉は、1830年6月8日、ゲーテが法務長官フォン・ミュラーに向けた次の言葉である。「私から文学を掘り取るのが一番うまいのはエッカーマンです。思慮深い態度を取って、すでに成し遂げられたことや始まってしまったことに関心を寄せてくるのです。ですから私が『ファウスト』を書き進め、第二部の最初の二幕が完成できたのは、何より彼のおかげなのです。」⁽⁴⁹⁾ 静かな夕べ、ゲーテは書齋で緑色の日よけ帽を被り、よくエッカーマンに『ファウスト』の書けた部分を断片的に読み聞かせた。エッカーマンは唯一そうすることが許された選ばれし者だった。

1826年5月末から確定していたのは、仮に原稿が印刷に回せる状態にあったとしても、『対話』をすぐには刊行できないということだった。この年の春、エッカーマンはこれまでの対話の内容を推敲することに熱中した。彼はイギリスの友人の一人を通じて、ロンドンの書籍出版業者とコネがあった。それはハンヒェンにも秘密だった。まだこの年の秋には、彼の本のドイツ語版だけでなく英語版も出るようになっていたのだ！ 5月26日、「星の巡りあわせはこれまでになく良かった」⁽⁵⁰⁾ とヴィルヘルム・ベルトラムに書いている。第1巻が1827年春に刊行されることになっていたゲーテ作品集新版の宣伝に『対話』は非常に適している、と彼は考えたのだ。5月30日、彼はゲーテに書面で自分の計画を伝えた。約250頁を短い時間で印刷に回せるようにするつもりだった。自分が書こうとしているのは「人々の心を刺激する意味のある重要なことだけ」⁽⁵¹⁾ で、もし選り出した箇所でも偶然にもいくつかのゲーテ作品が触れられていなければ、書籍出版業者の宣伝の意味で、「世間に知らせた方がよいことを意図的にもっと沢山話題にして全部述べる」⁽⁵²⁾ こともできる、と彼は書いた。この文章はエッカーマンの仕事の仕方を物語っている。つまり、年代順に厳密に書くことは彼の主たる関心事ではなかったのだ。その観点から、すでに5月に完成した原稿も厳密には順番に並べられていない。だからクライマックスをあれこれと作り出し、その時書いた方がよいことを挿入し、内的な意味を持った統一的で芸術的な文章とするために、厳密な時間経過という外的形式を犠牲にした。それは全く問題ではなかったのだ。彼は年代順に日付を付けて拘束してしまいたくなかった。エッカーマンが適切に述べているように、ただ「生のいぶき」⁽⁵³⁾ を増幅させたかったのだ。ゲーテの言葉の内に潜む内的真実を伝え、要約することが主要目的だった。外的な事実という枠組みの中で、その目的が達成されればよかった。そうしなければこの枠組みはあっさりと突破されてしまうのだ。エッカーマンは年代記を書いているのでなかった。芸術家の本能で執筆していたのだ。

ゲーテはこの計画に何と言ったのだろうか？ 彼はエッカーマンの手紙をほとんど読んでいな

かった。エッカーマン自身が彼の所にやって来たからである。5月30日、二人は長時間に渡って話し合い合意に至ったが、ゲーテはそれについて沈黙し、誰にも漏らしていない。エッカーマンでさえ何も語らなかった！ 一年後ハンヒェンが待ちきれず苛立ちを募らせると、彼は渋々真実を伝えた。つまり、ゲーテ作品集が五冊、それからシラーとの往復書簡が出ることになっているので、その後によく自分との対話録が出版されるというのである。早くても二三年後のことではないか！ エッカーマンが不機嫌にならなかったのは、その必然性を十分に理解していたからである。彼はこの本によって自分の将来の暮らしを立て直すつもりだった。平静さを失うことなく、1827年3月2日、フィアンセに次のように書いている。「この本は将来、ドイツ文学の中で小さくはない場所を占めるでしょう。また私はこの本によって、市民的な幸福の基盤が築かれることを望んでいます。しかし、差し当たり完成させられそうにありません。素材が毎日毎日増えてきているから、出版するにはまだ早いのです。」⁽⁵⁴⁾ゲーテ自身が鶴の一言で決断を下していたことが、エッカーマンの次の言葉に暗示されている。つまり、自分では差し当たり何もできないので、「そのことはまだそっとしておくしかありません。時間が許す限り、落ち着いて全身全霊をかけて、自分自身の創作活動に真面目に取り組むことが大事なのです。」⁽⁵⁵⁾彼は実際にそうした。

1826/27年の冬は収穫が大きかった。1827年2月5日、「かなりの分量の中の85頁分を今月書き上げました」⁽⁵⁶⁾とフィアンセに報告している。「こんなにも沢山自分のために仕事できたのは、ゲーテのために仕事をするのがそんなに苦にならなかったからです。二年間、ゲーテのためにちっとも筆が進まなかったけれど、前と変わらずずっと私に愛情を寄せてくれています。君もゲーテの無私無欲の大きさが分かるでしょう。私はむしろゲーテから多大なる恩を受けています。私が知っていることやできることはすべてゲーテのおかげだし、人が羨むほど毎日ゲーテのそばにいて、知識という宝を人よりも沢山集め、ゲーテの経験を自分のために利用できるのですから。」⁽⁵⁷⁾このように彼は大袈裟に言っているが、ふとした感情の縛れは何も変わらなかった。だがここに明らかなのは、エッカーマンとゲーテの間には比類のない関係があって、それがエッカーマンの側からも示されている、ということである。当時はそういうことだったのだ。そしてその後もそういうことなのだ。――

少し不信感を抱くようになっていたフィアンセも、必ずしも責め立てはしなかった。だから彼は幸福な楽観主義の中で、少しばかり嫌な思いをした個人的な運命を切り抜けていった。記念祝典誌の報酬をもらえるという約束が裏切られ懐が寂しかったが、1826年6月、ブレッケーデにいる彼女を訪ねた。それから彼女と兄のクリスティアン、それにその妻ドレットと一緒に、六日間の予定で大好きなハンブルクとハノーファーを訪問した。ハノーファーにはハンヒェンの兄ヴィルヘルムがいた。7月14日、ワイマルに戻って来た。彼はこの旅行で十分休養できた。7月20日のハンヒェン宛の手紙には、これまでの手紙の中で最も陽気な気分が溢れている。エアフルトでは沢山のワイマルの友人に会った。この地で指揮者のフンメルが歌手のモルトケとコンサートを

行い、エッカーマンも参列した。ワイマルへ向かうと親しいイギリスの友人達が出迎えてくれた。ゲーテの所でツェルターとその娘ドーリスにも会った。彼らは二三日ここに滞在していたのだ。ゲーテがいつの間にか「ヘレナ」を完成させていたのには彼も驚いた。そして次のような告白を聞けて嬉しかった。「この作品が完成できたのは、あなたが手伝ってくれたおかげです。」⁽⁵⁸⁾

19日にはティーフルトへいつもと違った楽しい遠足をして、したたか酒を飲んだ。若きゲーテ（ゲーテの息子）が気前よくお金を出してくれた。彼と若いイギリス人、それにメロス夫妻とともに、エッカーマンはハンヒェンの健康を祈って乾杯した。「お昼にはゲーテの所でヴェルツブルクとヨハニスベルクの11年産の美味しいワインを沢山飲んでしまいました。他の人達が紅茶を飲んでいるのにね。」⁽⁵⁹⁾ ワイマルへの帰り道、アウグスト・フォン・ゲーテが彼に悩みを打ち明けた。こうしたことはこれまで見られないことだった。二人はお互いのことを正しく理解していなかったのだ。エッカーマンと兄弟の盃をかわした地方監督官テプファーがアウグストと一緒にになって、すぐに結婚するよう執拗に勧めてきた。彼らの言い分はこうだった。500ターラー以上のお金は必要ないんだよ。社交界や諸々のことに必要な莫大な費用も、誰も君に要求してこないさ。社交界に一役人が出入りすることはないんだから、と。晩にメロス教授が食事に招待され、集まった人々は「11年産の美味しいワインに酔いしれた。」「隣に座っていたナターリエ・フォン・ヘルダー嬢が、あなたの幸せを祈って乾杯、と言ってくれました。他の人も一緒に乾杯してくれたのです！」⁽⁶⁰⁾

日曜日にはシュテファン・シュッツェ博士と一緒に、エアフルトを過ぎた辺りに位置しているノイディーテンドルフを訪れた。その地にはヘルンフト派の人達が住んでいた。この誘いを断ることなどできなかった。真面目なハンヒェンは少しアルコールの匂いのする手紙を読んで、きっと首を横に振って考え込みに違いない。一方、陽気なエッカーマンはずっと大はしゃぎだった。

ブレッケーデを訪問した時はとりわけ観劇に夢中になり、ワイマルの若い女優の話になると、彼が物静かな人物なのを忘れるほどだった。ハンヒェンは苦しい夢を見て、それを1826年7月14日の手紙で書いている。エッカーマンは小柄な若手女優アウグステ・クラーツィヒと懇ろな友情関係にあったが、ハンヒェンの夢の中でアウグステが主役を演じていたのだ。「これと似たような恋愛関係には注意なさって下さいね」とハンヒェンは警告している。「だって現実よりも夢の方にそういった関係が見えてくるものですから。」⁽⁶¹⁾ 陽気な花婿はこの警告に従わなかった。その代わりに女性との交友関係をちらつかせている。「ベルリンのフォン・アルニム婦人（とても有名な人だ）が当地にいて、二週間私と楽しく過ごしました」⁽⁶²⁾ と9月18日に書いている。ハンヒェンはこれを読んで少なからず驚いてしまった。「彼女が言い寄ってくるのです。ゲーテと大公、それに私にね。二回も家にやって来ました。手袋の片方を私のポケットに入れてしまったと言って。恋文も書いてきました。彼女を無視し始めたことの文句が書いてありました。でも彼女がドイツ

中で最も天才的で才気に満ち、面白い女性なのは間違いありません。彼女が今よりも18歳若くないのが残念です。だって私は若い女性にだけ夢中になれるのですから。」⁽⁶³⁾ ハンヒェンを馬鹿にするにも程があるだろう。「ちなみに、あなたが書いていらっしゃる愛らしい御婦人の手袋はどうやってポケットに入ったのかしら？」⁽⁶⁴⁾ と10月5日に彼女は質問し返している。「君のそばにいられば、御婦人方の集まりがなくなると期待しているのですが。そうでなければ紳士の集まりに加わります。それで満足かい？」⁽⁶⁵⁾ それが彼の返答だった。

9月4日、有名なヘンリエッテ・ゾンタークが『セルビアの理髪師』でロジーンを演じて、ワイマル中を騒がせていた。そのことを彼は全く口にしなかった。それでハンヒェンは彼のことを余計に疑わしく思った。あの老ゲーテでさえこの有名な歌手に夢中だとブレッケーデで噂になっていたのだ。あなたの花婿はとても寂しい思いをしているんじゃない、と友人達は絶えずハンヒェンを^{からか}揶揄ったり嫌味を言ってきた。一方でエッカーマンは、良心に疚しいところなど全くなかった。12月18日、彼は冷淡にこう答えている。「あの奇麗なゾンタークには感動しませんでした。少し思わせぶりな演技で、全く我慢できませんでした。あの娘のことで、皆、大騒ぎしすぎです。ナポレオンやウェリントンにだってあんなふうにはできません。こんな感じだったから彼女に反発する気持ちになってしまって、いい加減と言うより、どうでもよくなってしまいました。」⁽⁶⁶⁾ エッカーマンがヘンリエッテ・ゾンタークに反発だって！ その逆で、ゲーテを通じて彼もその気になっていたのではないだろうか？ エッカーマンがハンス・フォン・ビューローに話したところによれば、ゲーテは当時、怒ってこう言ったそうである。「彼女がどのような人物であるか私は理解しているし、観客の無趣味に腹が立っているの、嫌がる二人の孫を引っ張って座敷席へ連れて行きました。それはまるでソドムとゴモラの方を振り返ったために妻を塩柱に変えられてしまったルートが、二人の娘を連れ去っていくのと同じでした。」⁽⁶⁷⁾ この逸話はエッカーマンというよりもビューローに由来するものだろう。ゲーテの態度を伝えてくれるようハンヒェンはエッカーマンに話を向けているが、彼女宛の手紙ではそのことに何も触れていないからである。

1826/27年の冬、個人授業は異常なまでの人気となった。沢山のイギリス人生徒がいたが、彼らは皆、エッカーマンの授業を受けたがった。聞き逃してはならない話をする面白い教師として、彼は生徒に接した。どれほどゲーテのことを洗いざらい話してやらねばならなかったことだろう！ ハンヒェンは執拗に彼の収入について知りたがり、多少は節約生活をしないといけません、と言って彼を非難した。だが「必要以上のことをする」⁽⁶⁸⁾ のは彼のやり方ではなかった。授業をすることで将来の生活基盤を築くことはできず、別の基盤を持たねばならなかったからである。ゲーテ作品集の第一回配本が完了するには、まだまだ時間が必要だった。見ず知らずの旅行者達にもひどく手こずった。ベルリンのシュティークリッツが、どの知り合いにもエッカーマンの住所を知らせていたのだ。彼の仲介があれば成功すること間違いなし、と言って。こうして彼は1826年9月、フランツ・グリルパルツァーと知り合いになった。グリルパルツァーは作曲家フ

ランツ・ヒラーの芳名帳に書いた詩の中で、おそらく初めて、後にしばしば軽視された「善良な」という形容詞を添えてエッカーマンの名を書き記した。

1827年、イギリス人生徒の減少は深刻さを増していった。だからエッカーマンは仕事を探さなくてはならなくなった。1月からは再びゲーテ作品集と、年に一冊発行される『芸術と古代』を手伝った。これまで以上に、ゲーテという存在がエッカーマンの人生の中で重要な場所を占めていった。ゲーテの生活と創作活動は、1827年の日記に記された約130名にも上る訪問者に見て取ることができる。実際の訪問者はもっと多い。一緒に遠出することも多くなった。遠出の際にゲーテは「前時代の記憶」⁽⁶⁹⁾を蘇らせることを好んだ。7月5日、ゲーテは日記の中で、パイロンの話に関連して「古いものを繰り返し、新しいものに気付く」⁽⁷⁰⁾と書いている。ゲーテはエッカーマンという注意深い聞き手を伴って、計画的な行動を取るようになっていった。この年の主要課題はエッカーマンに色彩論を教えることであった。ゲーテは生徒が進歩していくのが嬉しかった。エッカーマンはきちんと、この学問に関する講義ノートをつけていた。8月12日、彼は「色彩に関する事柄に才気溢れんばかりに取り組ん」⁽⁷¹⁾で、10月28日には「生理学上の色彩における最新の成果」⁽⁷²⁾をゲーテに披露している。彼の方でも独力でこの難しい分野に取り組んでいった。それは単にゲーテのためを思ってそうしたわけではない。ゲーテの教えてくれることが、創作の秘密を打ち明けているように思われたからである。1832年4月28日のマリアンネ・ヴィレマーへの手紙の中で、彼は次のように告白している。「奇妙に聞こえるかもしれませんが、私が言いたいのは、あらゆる詩的で文学的なものをもってしても、ゲーテの色彩論ほど大きくて内的な利益をもたらしてくれるものは他になかった、ということなのです。心の中だけでなく外部の根本現象の中にも私は神性を見出しています。根本現象の中に神性の息吹が直接感じ取れると何度も思いましたし、これまでになく重大な瞬間を体験できました。」――

1827年春、イギリス人生徒は完全にいなくなり、編集の仕事もほとんどなくなってしまった。エッカーマンが別の方法で生計を立てられるよう、ゲーテは本気で思案したようである。ゲーテの義兄で、有名な『リナルド・リナルディーニ』の著者ヴルピウスが公立図書館の館長をしていたが、ほとんどその職務を果たせないでいた。皆、彼の死を覚悟していた。その後を継いだのがリーマーだった。クロイターは学術的素養がなかったので秘書の職にとどまらなくてはならなかった。そうであるならば、エッカーマンのために場所が一つくらい空いてもよかったのだが。図書館の管理は依然としてゲーテの「監督業務」の一つで、すぐにこの新しい仕事を覚えるよう言われていたし、「あなたに定職を世話してやるのが最善の道だ」⁽⁷³⁾とゲーテも請け合っていた。エッカーマンは何ヶ月もの間、いわゆる伝記的な一覧表のための写しを作成し、図書館で職を得るための列に如才なく並んでいた。ゲーテもそれを喜んでいて。一方で、エッカーマンは仕事で図書館を利用することはなかった。家で仕事をしたのだ。「この仕事で何が得られるか、まだ私には分かりません。しかし、きっと多くはないでしょう」⁽⁷⁴⁾と1827年5月31日、かなり懐

疑的にハンヒェンに書いている。ハンヒェンはハンヒェンで、近い将来、彼が扶養者となって結婚できると考えていた。そんな時いつも彼女が考えていたのは、決して少なくはない自分の持参金のことだった。そのようなハンヒェンの計画に、彼はもはや心躍ることはなかった。少なくとも幸せな気分にはしてくれなかった。ずっと金欠状態だったにも関わらず、あの数ヶ月間、心地よい安らぎで彼を包んでくれた幸福とは程遠いものだった。彼が一番望んだのは、本を徐々に書き進め、対話を推敲し（『対話』の原型に関して言えば、最初の大部分は日記によるものである。第13章参照）、ゲーテ自身に時間を割くことだった。5月31日、「ゲーテは依然として、このワイマルで私の唯一の幸福です」とフィアンセに告白している。「彼と私は今ではよく庭で素晴らしい時を過ごし、二人だけで食事をします。一昨日は二人で四時間もテーブルに向かい合っていました。話し合うこともしませんでした！ この人の中にあるものときたら信じられないほどで、その精神は絶えず新鮮で若々しく、肉体も健全です。78歳なのにです。神々の寵児だし、それに相応しい人です。本当に偉大な人だし、ますますそう思ってしまう。私を愛してくれて本当に幸せです。」⁽⁷⁵⁾

エッカーマンの人生は、完全にゲーテのための人生となってしまった。

13. ゲーテの息子との確執

「少し嫌なことがあった。それは今も続いていて、深刻なものとなるかもしれない。そんな理由から、心の悩みをすぐにでも打ち明けられる友人もいないことだし、この紙に思っていることを吐露して、心を楽にしてみようと思う。」⁽⁷⁶⁾

1827年6月22日、エッカーマンが残した記録はこの言葉で始まっている。20年代、彼は自分用の日記に内容をメモするだけでなく、それを推敲もしていた。この記録はその中に残された唯一の長文の断片である。彼は二日前に起こった出来事について書き記している。原稿の最初の半分は1827年6月20日の『対話』の内容と一致している。その後起こったことを、彼は『対話』の中では沈黙している。それはゲーテの息子アウグストとの不愉快な出来事で、彼がワイマルで経験してきた沢山の出来事の中のほんの一つに過ぎない。しかし、彼自身が我々に説明してくれる唯一の出来事である。エッカーマンの話は以下の通りである。⁽⁷⁷⁾

そうこうするうちにヴォルフガング（ゲーテの孫）の芳名帳が順番に手渡され、読まれていきました。フォン・ゲーテ氏（このように言うときは息子の方を指す）が立ち上がって出て行こうとしました。

「まだ行ってはいけないよ」とゲーテが冗談めかして言いました。「前にも言ったように、お前

の罪を贖罪してから、お前のために部屋の中に掛けておいたものを見てもよいのだよ。」

「本気でそんなことを言っているのではないでしょうね」と言ってフォン・ゲーテ氏は微笑んで、食堂から右に続いているマジョリカ陶器が置いてある部屋に入って行きました。話題はいつの間にかベルリンのことに移り、法務長官が画家コルベの手紙を胸ポケットから取り出し、ゲーテに向かって読み始めました。

フォン・ゲーテ氏がまた食堂に戻って来ました。「ん？」とゲーテが言いました。「何か言うことでも？」

「何ともありませんよ」とフォン・ゲーテ氏は冗談めかして答えました。「この罪に責任があるのは私ではなく、この御婦人方の集まりにあるということ以外には。」

「彼なら自力で何とかできるでしょうね」とゲーテは笑って言いました。「エッカーマン、あなたも一度部屋の中に入って行ってごらん下さい。さあ、博士に見せてあげなさい。博士がどんな感想を抱くか見ものだね。」法務長官はゲーテの元に留まり、コルベの手紙の続きを読み始めました。何年も前から親しくしていた友人同士として、私達は腕を組んで食堂から出て行き、互いに冗談を言い合いました。「不思議なものを見つけ出すまで探さなくてはならなかったのです。あなたにも探してほしいのです、大博士。そんなもの、ここにありますか？ あなたも見て回って下さい、博士！」

「ここには」と私は言いました。「よく知っているもの以外何もありませんね。」

私達は別の部屋に入って行きました。「でしたら、きっとここにあるのでしょうか」とフォン・ゲーテ氏は言って、以前はアルコーブ（壁に入り込んだ床の間式の小部屋）だった所に私を連れて行き、カーテンを開けました。色彩論関連の厚紙と器具が置いてありました。

「これではありませんね」と私は答えました。

「そうですね」とフォン・ゲーテ氏は言って、三番目の部屋と最後の部屋に入って行きました。「だったらここに違いありません。この箱の中にあると思ったのですが、そこには入っていませんでした。ここにありました！」そう言って彼は私を二つの油絵の前に連れて行きました。私の目に真っ先に飛び込んできたその油絵は、主題が全く馬鹿げていて、空疎で取るに足らないものを描いていました。もっとも、仕上げにおける芸術家の器用さははっきりと表れていました。私達はこれらの絵について話し合い冗談を言って、また元の場所に戻りました。最後の部屋ではいつものように冗談を言い合いました。フォン・ゲーテ氏はこう言いました。「博士、今や私は偉大な人物ですから全世界をものともしません。いつもこれ（原注）を腰に付けていますし、誰かが邪魔をするのなら、その人は一文無しですね。」

原注：ここで言われているのはおそらく剣のことで、1826年1月から皇太子の侍従となったアウグストは、制服を着る時に身に付けていた。尚、この秘密の油絵が何を描いていたかは

今日まで不明である。

「一文無しになさるのですか？」と私は聞きました。

「ええ」とフォン・ゲーテ氏は答えました。「誰も私の権利を侵すことはできません！」

「誰もですか？」と私は聞き返しました。

「もちろん」とフォン・ゲーテ氏は答えました。「父を除いてですが！ 父には畏敬の念を抱いていますし、その畏敬の念はとても大きなものですので、決して傷つけてはならないのです！」

私は彼のことを褒め称え、ドアを開けようと思いました。フォン・ゲーテ氏はこう言いました。「あなたは中に入ってからあの絵の感想を考えて、父に言うおつもりですか。私が御婦人方にしたような感想がよかったとは思ってはいませんか？」

「分かりました」と私は答えました。「私もあの絵を見ましたから。もっとも、あなたの言葉も分かりますし、適切だと思いますが。」

「早くして下さい、博士。何を言うか考えて下さい！」

私はこう言いました。「何も思いつきません。ですから何も言わないか、口に出てくる言葉を言うだけです。」私はドアを開け、中に入って行きました。

「それで」とゲーテが言いました。「あの絵をどう思いましたか？ 息子と同じように自分が罰せられているとお感じになりませんでしたか？」

「まああの出来でしたね」と私は答えました。「ただし、そこで描き出されていたのは恐ろしく取るに足らないものです。あの絵を見ても大きな苦しみは感じませんでした。」

ゲーテは言いました。「人を意のままに操るなんてできないものだね。法務長官が何を言うか聞いてみることにしよう。長官、あなたもあの絵を一度見てくれませんか。」私は長官を絵の場所に案内しました。その絵をすぐに見ましたが、長官の言葉は我々の考えと一致するものでした。これらの絵の隣には肖像画が二つ置いてあって、一つはシュテルンバルク伯爵夫人、もう一つはフォン・ハーマンのもので、後者は現物を鉛筆で模写したものでした。裏面にはゲーテへの献辞が書かれていました。法務長官はその筆跡を見て、それから我々は交互にその肖像画を手に取りました。「このハーマンを」と長官が言いました。「ゲーテは今世紀の最も偉大な人物と見なしています。カントよりも上位に据えてさえいます。あなたはハーマンの本をお読みになったことがありますか？」

「いいえ」と私は言いました。「ですが絶対に読んでみようと思っています。」それからまた私達は食堂に戻って行きました。ウルリーケ嬢が麦藁帽子をかぶり、妹のフォン・ゲーテ夫人（オットーリエ）を追って庭へ降りて行きました。法務長官はまたゲーテと向かい合って席に着き、スケッチの入ったファイルを取り出しました。私は近くで彼の言葉に耳を傾けたいと思いましたが、若いゲーテが手招きしてきました。「来て下さい、博士」と彼は言いました。「見せたいもの

があるのです。」私は躊躇しながら天井の間のドアを通して、青色の間へと入って行きました。後ろを振り返ると法務長官とゲーテが座っているのが見え、内容は分かりませんでしたが、二人の会話を聞くことができました。

「見てほしいものがあるのです、博士」とフォン・ゲーテ氏は言いました。「そんなに簡単には見られないものですし、きっと私に感謝して下さることと思います。つまりユーリエ（フォン・エルゴフシュタイン）伯爵夫人が写生した素晴らしい風景画とか、この本に載っているものすべてをご覧いただけます。気楽になさって下さい。椅子を取ってこちらに座って下さい。」

私は大喜びでそうしました。本をめくり、卓越した物の見方や描写に圧倒されて幸せな気分でした。「こんな楽しみを得られて、途轍もなくあなたに感謝しています」と私は述べ、フォン・ゲーテ氏の手を握りました。

「博士、喜んで下さってよかった」と彼は言って、私の左手を取って強く握り、振り回しました。ですから私は叫び声をあげてしまわないかと心配でした。「骨が折れてしまいますよ」と私は叫びました。「お願いですからやめて下さい！」

この立派な友人が手を緩め笑いました。「あなたの腕を折ってしまうのも楽しいでしょうね。」

「羽目を外しすぎですし、図に乗りすぎですよ」と私は言いました。

「ですが博士、私も楽しませて下さい。さあ嘘をついてみて下さい！ 真面目ぶらないで、ユーリエ伯爵夫人に話しかけて、こう言ってみて下さい。あなたの本を目にすることができてとても嬉しかったです、と。ですがこっそりと、父の知らない所ですよ。私が見せたと言ってはいけません。」

私は言いました。「嘘をつくつもりはありません。スケッチを目にして私がどれほど幸福な気持ちになれたか、伯爵夫人に言うつもりです。ですが、この楽しみが得られたのはあなたのおかげだと付け加えるつもりです。」

「分かりました。その通りかもしれません」とフォン・ゲーテ氏は言いました。「それでよろしいですよ。」私達は素晴らしい絵をいくつかを見て、伯爵夫人の非凡な才能を共に喜びました。「ここで」と私は言いました。「あの油絵の代償を受けられるではないですか。あなたの父上はあの油絵で我々を罰しようとなさいました。ですが、それはうまくいきませんでした。」私は付け加えてこうも言いました。「私達は毎日、劇場やその他の至る所で取るに足らないものを見るのに慣れていますが、あの方にとって、あの馬鹿げたものは私達以上に大きな目の痛みだったと想像できます。絶えず偉大で純粋なものの中を彷徨い、自分の一生を才氣溢れる芸術の育成につき込んだあの方は、間違いなく苦しんだことでしょう。私達が先程見たような種類の絵が、まだ19世紀に生まれてくるのを目にしたのでありますから。」

「本当にそうですね」とフォン・ゲーテ氏は答えました。彼はドアの方を向いて出て行きながら、「ですが、馬鹿げたことには全然歯が立ちません。〈神々でさえ愚鈍さと戦っても失敗に終わ

ります」⁽⁷⁸⁾」と引用しながら、意味ありげに言いました。

私は椅子の方に向かいながら「それは偉大な言葉ですね」と言いました。「誰がそう言ったのですか？」

「シラーですよ！」とフォン・ゲート氏は答えました。「『少女』の中ですよ！」

「シェークスピアならそう言ったかもしれません。」

「どうしてシラーではないのですか？ シラーがそのような言葉を言ったとは思わないのですか？」

「シラーはそう言ったとは思いますが、シラーが描いた少女の意味においてではありません。むしろシェークスピアのような観点で少女は描かれています。」

「タルボットが死の場面でそう言っています。タルボットの数でも語れるほどシラーが偉大な人物だったとあなたは思わないのですか？」これらの言葉は核心をついていたので、私は降参しました。

「ねえ博士、あなたは偉大な人物です、私は大好きです。ですが、シラーを評価しようとなさらないのであれば、私はあなたを殺しかねませんよ。」

私はふざけてこう言いました。「シラーのために殺されるのは残念なことですね。まだいろんなことをこの世でやってみたいと思っていましたから。でも私はシラーを評価しています。」

「いいえ、あなたはシラーを評価していません。」

「なぜ評価していないと分かるのですか。どうやってそれが証明できるのですか？」

「あなたはシラーのことを話しません。無視しているのです。」

「シラーを否定はしていません！」

「ですが、シラーの一節があなたの口から出ることはありません。」

「ほとんど実用的なものはないと思っているからです。」

「シラーの言葉はどんなものでも実用的です、生活のどんな場面でも使用できます。ですが、あなたは御存知ありません。」

「おっしゃるように」と私は言いました。「シラーに関する私の知識は人並みですが、シラーを沢山読んで尊敬した時期がありました。当時は何もいいことがなかったのです。しかし、そんな時期も終わりました。私はもっと高貴なものに接するようになっていきますので、もうシラーには戻れません。」

「シラーの言葉を感じ取るセンスがないと言ったらどうですか！ 生きている間、ある意味で永遠に幼虫のまま留まる人もいますが、シラーに関して言えば、あなたはまさにそのような人です。あなたは視野が狭いのです！」彼は私の方に歩み寄って来て、私の額に指で線を引きました。「これであなたが視野の狭い人で、シラーを決して理解なさらないということが分かりますね！」

この侮辱的な言葉を聞いて、血が沸き立ってくるのが分かりました。しかし、場所をわきま

る気持ちから自分の感情を抑えました。「では、あなたのシラーと先に行ってください」と私は言いました。「私は他の人よりもシラーの長所も短所を十分に理解しています。シラーは優れた劇作家ですし、舞台から多大な影響力を与えています。しかし人間をこれまでよりも高い段階へ形成していくためには、シラーから多くを得ることはできません。彼の初期の戯曲は粗削りで、後期の戯曲でも自然と因習を侮辱するのは珍しいことではありません。」

『『群盗』のことを言っているのですね』とフォン・ゲーテ氏は言いました。「それは私も認めますが、後期の戯曲はドイツ文学の誇りです。父も初期作品で沢山の罪を犯しています。」

「芸術に対してはそうかもしれません」と私は言いました。「しかし、自然に対してではありません。あなたの父上は健康な体でお生まれになり、非の打ちどころがありませんでした。一方シラーは、文化を通じて初めて本来の彼になったのです。」

「何者かになるために」とフォン・ゲーテ氏は言いました。「シラーもまた何者かではなくてはなりません。彼は磨かれて輝きを放つダイヤモンドの原石でした。自分自身でそのような輝きを生み出せるように、一個のダイヤモンドである必要があったのです。」

私はこの比喩を喜んで、そう彼に伝えました。

エッカーマンの日記に記されたこの文面はこうして中断する。彼はひどく侮辱を受けたものの、その後すぐにアウグストと仲直りした。この出来事の後日談を、彼は6月27日のゲーテ宛の手紙で述べている。それは次のような説明から始まっている。「閣下、あなたの御息子と仲直りしてもそんなに幸せでないのに、本日あえて食卓に就いてよいかどうか私には分かりません。私はまた元通り元気ですし、この意見のすれ違いが収束することを願っています。」ゲーテの日記には、この確執について一言も触れられていない。父親の鶴の一声ですぐに仲裁がなされたのは明らかである。というのも、エッカーマンは四日間ゲーテから離れていたものの、同じ6月27日、また二人で食卓に就いているからである。

エッカーマンの心に刻印されたこの口論から明らかなのは、これほど目立たないにしても、ゲーテの家に苛立った気分がないわけではなかった、ということである。父親が高位にあって堂々と力を行使していたことは、侍従をしていた息子のアウグスト・フォン・ゲーテを少年らしい思い上がりへと、それどころか残忍さへと——本当のものであれ演技であれ——導いてしまった。ゲーテの家に出入りする友人の中で最も無力なエッカーマンに対して、彼はメフィストフェレスのような気まぐれをすることを好んだ。おそらく、少しばかり嫉妬もあったことだろう。思っていた以上に父親が協力者達と親しくなって、息子は自分がのけ者にされていると感じたのだ。エッカーマンが父親に心の底から捧げている一方的な敬意は、息子には大袈裟なものだったし、それどころか奇妙にさえ感じられた。そういった敬意は、アウグストには視野の狭さを示す

ものであった。シラーに関する知識が不足していると言って、このゲーテ崇拜者を不意打ちすることで、少しの間アウグストは、エッカーマンもへりくだる大勝利を取めることができた。実際、アウグストはシラーの熱狂的な崇拜者であった。制御できない彼の本性は、父親の大理石のような静けさよりも、シラーの燃え上がる怪物を好んだ。アウグストの最も信頼できる友人カール・フォン・ホルタイは回想録の中で次のように断言している。「アウグストには、ゲーテの傍らにシラーがいました。——いや、シラーはゲーテの上にいるのかもしれませんが！ ゲーテの家にやって来て、死者を顧みることなく生者を称えることばかり考えようとする人は、呪われてしまう方がいい！」

そのような体験は、大らかな心の中にも一滴の苦味を染み込ませるものである。きっとこの出来事があったからこそ、エッカーマンは自身の格言集に次の二文を付け加えて、苦味のある一滴を書き加えたのだ。「英雄の息子は役立たず、と人は言う。自然は父親の中で使い果たされ頂点に達し、その後衰えていく。」——ところで、この「人」とは誰のことだろう？ 他ならぬゲーテ自身である！ ゲーテは『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』のレナルドーに、老人の言葉⁽⁷⁹⁾としてこの言葉を引用させたのだ。

14. 気分の乱高下

1827年6月、第一司書のヴルピウスが予想通り亡くなった。彼の未亡人にはまだ半年分給与が支払われることになっていたが、その間に司書のポストを補充しなければならなかった。エッカーマンは以前引き受けた退屈な一覧表作成のために、夏の数ヶ月を犠牲にしていた。9月初旬には、各方面から将来の第二司書のお祝いを言われた。ゲーテは大公に手紙を書いたと言われている。このポストはエッカーマンに与えられて当然だと。だが、そんな手紙は見つかっていない。この件に関して、ゲーテ自身は沈黙を守っている。エッカーマンもゲーテに問い質していないのかもしれない。10月には、人々があれこれと文句を口にするようになった。クロイターを差し置いて、エッカーマンにそのポストを与えるのは不当である、そう感じる人が少なからずいたのである。クロイター自身も非常に激しい調子で自分に優先権があると主張したが、それはエッカーマンも予想していなかったようである。だが彼に第三司書のポストを与えようにも、それはゲーテにはできないことだった。——結局、その件は実現しなかったということなのだろう。それはそうかもしれない——でも、もしハンヒェンがいてくれたら、何か言ってくれたかもしれない！

エッカーマンはお金が必要だったので、図書館のために働いた分の支払いを頼んだ。そこで彼は25ターラーを受け取った。同時にゲーテからも20ターラーを受け取った。お金が手に入って嬉しかった。確かに彼は、夏の間中「ゲーテの所で沢山飲食していたが、自分の仕事にはいまだに手を付けていなかった」⁽⁸⁰⁾からである。差し当たり図書館の金庫は空っぽで、最終的には二年間、

リーマーとクロイターの二人だけで仕事を順調にこなしていた。——そんな時に第三の役人が必要だろうか？ また、ゲーテはいつも「交友関係と仕事関係」⁽⁸¹⁾を厳密に分け、「一方を有利とするために他方に不利益を与えない」⁽⁸²⁾ことを重視していた。エッカーマン自身それを正しいことだと思っていたが、フィアンセにどうやって分かってもらったらいいのだろうか？ 良くない決定がなされるのは予想できたので、彼女を慰めようと、これまでワイマルで成し遂げてきたこと並べ立てた。まず、書き溜めてあるゲーテとの対話録である。もちろんそれは、仮に誰かがすぐに何百ターラーのお金を支払うと約束しても、引き渡せない状態にあったのだが。それから英語とフランス語の知識である。「自分の着想に素質がなくても」⁽⁸³⁾遅ればせながら二つの言語から翻訳できるようになったと彼は彼女に述べている。夏には流暢に英語を話せるようになり、原文でシェークスピアやバイロン、スコットも難なく読めるようになったとも付け加えた。さらに四年前から毎晩訪れていた演劇に関する十分な知識を挙げた。彼の説明はこうである。もしいつか劇場で働けるのなら、きっとそれはとても役に立つことでしょう。つまり、将来的にどんな場所でも自分の生活基盤を見出すことができますし、「ワイマルや他の場所にも限定されません。」⁽⁸⁴⁾しかし、こうした多面的な専門教育に当たって、この地に滞在することはどうしても必要なことでした。「この地での輝かしい人間関係」⁽⁸⁵⁾を通じて、「いわば全世界を手に入れ」⁽⁸⁶⁾たわけで、「極めて良い条件で推薦される」⁽⁸⁷⁾ことになるでしょう。また、ドイツ、イギリス、フランスの作家や書籍出版業者とも親しくなったことを挙げた。彼はこう述べている。どの雑誌にも自分の道が開かれています。確かに、ゲーテと近い関係にあるので「コネ」⁽⁸⁸⁾もできましたが、まだ自分の望むように書くことは許されていません。そうは言っても、特にゲーテとの交際によって与えられた「教養という不死身の宝」⁽⁸⁹⁾を手に入れることができたのです！ 結局、また「期待外れの結末」⁽⁹⁰⁾が繰り返されたということになるわけですが、当分の間ここに留まって、外的な状況から自分に有利な結果が出て来るのを期待するしかありません。万一の場合、君と一緒にイギリス人用の寄宿舎を、ここかハノーファーに開くこともできるでしょう。こうエッカーマンは説明した。こうした空中楼阁の中で、後者の提案が家計のやり繰りのうまいハンヒェンには、おそらく第一候補であったのは言うまでもない。

だが、この仕事がいかに不安定なものであるか、突如として明らかになった。1828年2月、メロス教授がチフスで亡くなり、生徒達も逃げるように寄宿舎を去り、故郷へと帰って行った。エッカーマンも突然路頭に迷い、宿屋で食事をしなければならなくなった。それは彼の資金では許されないことだった。彼の生活基盤が一撃で破壊されたわけである。彼は一体どうなるのだろうか？ 2月20日、ゲーテは「エッカーマンと二人だけで食卓に就」⁽⁹¹⁾いて次のように打ち明けた。私はあなたのために新しいことを考えてみました。詳しいことはアウグストが知らせてくれるでしょう。エッカーマンにはその言葉を疑わしく思った。「それが何になるか怪しいものです」とハンヒェンにすぐに書いている。「ワイマルを離れるのを思いとどまるよう忠告するゲーテの言葉か

ら、私は沢山のことを聞いてきましたから。」⁽⁹²⁾ ハノーファーへ戻って来てほしいというハンヒェンの密かな願いに、初めて彼は逆らおうと思わなくなっていた。アウグスト・フォン・ゲーテは「新しい目論見」⁽⁹³⁾を打ち明けるのを一日一日と伸ばしていた。24日、遂に打ち明けられる時がやって来た。あなたには引き続き作品集の編集に従事してほしいし、あなたの雇用をこれまでよりも強力に推し進めるために、図書館のための仕事も継続してほしい、ということだった。あなたが心配なく暮らしていけるように、その間は父があなたの生活基盤を負担してくれるでしょう。それがアウグストの説明だった。

早速翌日には共同作業が始まり、『遍歴時代』に取り掛かった。この作品の結末を最終的にどのようにするか提案するために、エッカーマンは原稿を読まなければならなかった。ゲーテ自身はこの作品にあまりにも長く関わっていたため関心を失っていたのだ。ゲーテと新たに緊密な共同作業ができる——エッカーマン以上に幸福な者がいるだろうか？ 彼が最も誇らしかったのは、ささやかながらもゲーテの創作活動に直接的に貢献し、ゲーテを「実務的に」手助けできるということだった。イギリス人生徒がいなくなったのはありがたいことだった！ 彼らがいたせいで精神的生活を送れないでいたのだ。彼は再び幸福に酔いしれ、「この夏からは沢山の良いこと」⁽⁹⁴⁾が起ころのを期待した。ハンヒェンも図書館のポストにまだ見込みがあると聞いて喜んだことだろう。

しかしハンヒェンの落胆ぶりは痛ましいほどだった。彼女の考えでは、それは異常で、あり得ないことだったし、ゲーテがお金の問題を息子に任せているのは全く気に入らないと言い張った。この取り決め全体の中に彼女が見ていたのは、意味のない時間稼ぎでしかなく、エッカーマンに自分の「作品」⁽⁹⁵⁾をまだ出させないようにするものだった。「私には今も想像できず、ずっと想像できなかったことがあります」と彼女はいつになく毅然とした態度で述べている。「うまく立ち回る能力がゲーテにないために、あなたが確実に安心できる生活基盤を築けないでいる、ということですよ！」⁽⁹⁶⁾

何ヶ月もの間ずっと、エッカーマンは一日おきにゲーテを訪ねた。『遍歴時代』、第二次ローマ滞在、色彩論などの古い原稿に目を通し、それらを整理し「入れ替え」⁽⁹⁷⁾た。エッカーマンが「適切な提案」⁽⁹⁸⁾をしてくれたおかげで、すでに4月には「作品集後半の編集に一層の統一感」⁽⁹⁹⁾が生まれてきた。ゲーテは「エッカーマンの関与に刺激を受け、眼球の調査に新たに注目する」⁽¹⁰⁰⁾（4月2日）ようになった。どうやってエッカーマンの生活基盤に片をつけるかは不透明なままだった。ゲーテの家計簿にはエッカーマン用の予算はなかったし、エッカーマンが以前挙げた唯一の数字でさえ、1827年の20ターラーだった。見た目は彼の調子は悪くはなさそうだった。だが彼は、自分がやらないと誓っていたもの、つまり授業を再開した。週二回、フォン・シュヴェントラー校長の元で寄宿生のイギリス人達と食卓を供にした。聖霊降臨祭には、新しい衣装でたっぷり着飾った。ハンヒェンは早くも彼の収入を計算し直して、自分の貯金箱について言及してい

る。

大公の急死後、ゲーテは7月17日に二ヶ月の予定でドルンブルクに引きこもった。だからエッカーマンには時間がたっぷりあった。ところが秋になると、フィアンセが強く非難するようになってきた。手紙を書いてもあなたは返事もくれず、思いやりのない態度を取っている、と言って。すぐに結婚するのはもはや考えられなかった。彼は王女の教育係の女官エスペランス・ジルヴェスターとの付き合いが多くあり、お茶やデートに誘う可愛いメモも残されている。それらは、あたかも鍵穴を通して行かねばならなかったかのようになり、小さく折りたたまれていた。城と彼の間で何度もこうしたメモが行き来した。エスペランス嬢は7月にワイマルを去っていたが、ハンヒェンは気をもんでいた。というのも、エッカーマンは先頃口を滑らせていたからだ。エスペランスはイタリア旅行に同行するよう彼に提案していた。そのことに単純朴訥なハンヒェンは「いくら驚いても驚き足りない」⁽¹⁰¹⁾ ほどだった。「若い男」に対して「若い女の子」がこんなにも無鉄砲ないたづらをするのは「あまりに自由すぎるシデリカシーがなさすぎる」と思ったのだ。エッカーマンには、この女性からの手紙をハンヒェンに見せてやってほしいものだ！ 彼は彼女を落ち着かせた。ちょっとした冗談だよ、と。だが不信心という棘が後に残った。彼が可愛い女優達に詩を書き送り、お返しとして上品なカップを受け取っているという噂が謎めいた方法でブレッケーデにまで広まっていたが、そのこと以上にこの棘は彼女を苦しめた。これに対して、エッカーマンは少し不愛想に説明した。そんなのは嘘に決まっています。ワイマルではそんなに気前よく贈り物なんかしないし、少なくとも私にはありませんでした、と。彼が実際何をしていたか、フィアンセに何も漏らしていない。11月になってようやく彼は「より大きな仕事」⁽¹⁰²⁾ に向けて落ち着きを取り戻していった。

ゲーテが長期に渡って不在にしていたので、二人の交際はやや緩やかなものになっていた。1828年のゲーテの日記も言葉少なである。ドルンブルクでゲーテは自然科学研究に没頭していた。毎日の編集上の仕事とは関係ない事柄に関しては、ようやく冬になって話し合うようになった。ハンヒェンの催促はこれまでよりも切迫感を増していったが、エッカーマンは無関心さで自らの身を守った。そういった態度はますます彼女には理解できないものとなっていた。だがハノーファーで空席のポストが見つければ、依然として忠実に彼に知らせていた。秋にはハノーファーの図書館で司書の募集があった。ここでも給与は僅かだったが、勤務時間は一日たったの5時間だった。エッカーマンはゲーテ目がけて一直線に進んできたわけだから、そのポストが相応しいとは全く思わなかった。だが「二人のゲーテ」⁽¹⁰³⁾ を何とか決心させるために、ハンヒェンは少なくとも彼が自分と一致団結して熱意を示してくれることを期待した。ところが彼はそれを拒否したのだった。彼女が10月18日に耳にしなければならなかったのは、アウグストがゲーテと話して次のように強く諫めたということだった。もしハノーファーのポストが600から800ターラーなら飛びついた方がいいですが、それは今のワイマルの「有利な」⁽¹⁰⁴⁾ 状況以下ですよ。もっ

とも我々もあなたに100ターラーさえ与えることもできず、今の政府では新しい司書も全く雇えないでいます。しかし、あなたには少なくとももう一年ここで頑張っ、その間に「文壇に登壇して」⁽¹⁰⁵⁾ 欲しいのです。そうなればあなたは「有名人」⁽¹⁰⁶⁾ になって、「ベルリンやミュンヘン、またはどこか他の地域から」⁽¹⁰⁷⁾ お誘いも来ることでしょう。そうアウグストは語った。その話が出た時、自信たっぷりの花婿は自分の不運に怒りもしなかった。むしろその反対で、自分がワイマルやハノーファーで「取るに足らないポストに拘束され」⁽¹⁰⁸⁾ ないのを「途轍もない幸福」⁽¹⁰⁹⁾ と感じた。

ワイマルの図書館ではどうやら何の動きもないようで、ハンヒェンには非常に我慢ならない事態だった。「200ターラーの俸給も残っていないなんて、貧乏な国に違くないですね」⁽¹¹⁰⁾ と怒りを露わにしている。「ただ将来の希望を示唆することで、ワイマルの人達はあなたを何年も引き留めておこうとしています。結局、あなたが何の成果も得られないのは明らかだわ。」⁽¹¹¹⁾ だが、ハノーファーのポストが取るに足らないものであったとしても、彼女にはいくばくかの名声を与えるものだった。この仕事では下働きの書記業務をする必要がなかったし、「しばしば読みにくいラテン語で書かれた」⁽¹¹²⁾ 文書を解説しなければならなかった。こんなにも就職の心配をされていたこの不幸者は、それに対して何と答えたのだろうか。「読みやすいラテン語であっても、ほとんど読むこともできません。読みにくいラテン語なら尚更です。英語かフランス語ならできますが。ラテン文学は私に何も与えてくれないので、ラテン語に関するものはすべて気が進まないのです。」⁽¹¹³⁾ ワイマルの図書館のポストが手に入らなくて残念に思う気持ちもどんどん萎んでいった。「私は取るに足らないポストに就くことを恐れています。それでは飢えてしまいますし、まともなことを成し遂げ獲得するための時間を失ってしまいますから。」⁽¹¹⁴⁾ 彼はこうも付け加えている。他の場所にいたら私は自分のために何も実現できなかったとゲーテが言っていますが、それは全く正しいです。そのためにはまず有名にならなくてはいけないし、だからしばらくの間まだワイマルに留まるつもりです。最近も良いものが沢山書けました。確かに、その中から見せられるものは何もなく、詩も送ってやることもできません。というのも、自由になる時間は「より大きな仕事」に費やしているからです。私の立場はきつととても良いものになるでしょう。君は私を信用しさえすればいいし、それで満足してほしい！ こうエッカーマンは説明したが、ハンヒェンは満足などできなかった。婚約してすでに十年になり、親類や知人が好奇心から疑い深い質問を投げかけてきて、それから逃れられなくなってきたからである。彼女は非常に不愛想にこう答えた。「ゲーテは沢山約束してくれるが履行してくれない、とあなたは言っていましたね。それは本当のことなのでしょう。あなたは法学の勉強を続けるべきだったのではないのでしょうか。私達二人とも騙されているんじゃないかしら！」⁽¹¹⁵⁾ ハンヒェンとの文通はますます気まずいものとなっていった。

1828年末には多くのことが確実となっていた。つまり、ワイマルで協力者として働いていた友

人エッカーマンのために、ゲーテは待ちきれないフィアンセが望む形で何か後に残ることをしてやろうと希望していたのだが、それを完全に断念したのだ。「文壇に登場する」こと以外エッカーマンに可能性はない、とゲーテは考えた。その際ゲーテが念頭に置いていたのは『対話』だけであった。エッカーマンは1829年1月6日、『対話』に関する「個々の注」⁽¹¹⁶⁾をゲーテに提出している。いずれにしても、それはいくつかの言葉の正しさを確認するためのものである。1829年3月16日、二人は再度このことについて話し合っている。より深い意味がゲーテの日記の根底にある。「午後、エッカーマン博士。対話録のノートを持ってきた。また、シラーとの往復書簡についても話し合った。」⁽¹¹⁷⁾1829年末にゲーテ＝シラー往復書簡が出版されることになっていたのだ。その後になって1826年に約束した時期がようやく訪れて、『対話』が出版できるのである。この作品が成功すれば、文壇における彼の地位は確固たるものとなり、後々の仕事に繋がっていくことになる。だがこの作品は、神経を消耗させる収入目当ての仕事から解放され、ワイマルに留まる場合にのみ成熟していくものだった。ゲーテもこの作品を自分の一部と見なしていたはずで、後世へ向けた最後のメッセージとなるものだった。その希望が実現されるのを確信することで、ハンビェンは差し当たり満足しなけりなかつた。

こうしてゲーテとの交際と共同作業は、これまでと変わりなく継続していった。1829年2月、エッカーマンはゲーテの色彩論を「限定的なものに作り変える」⁽¹¹⁸⁾ことを思いついた。つまり短い「要約」版に編集し直そうというのだ。だがこの話し合いは、2月19日、ゲーテと衝突するという結果に終わった。エッカーマンは「雪の中の青い影」を解説する際に、ゲーテが誤りを犯していると思ったのだ。自分の作品が非難されても狼狽^{うろた}えることのなかつたオリンポスの住人たるゲーテは、この件に関しては非常に敏感だった。ゲーテは激しく嘔みついて、自分の最も忠実な生徒もまた「異端者」に鞍替えしようとしているのに深く傷ついた。どうにか元通り仲直りして別れたが、憤懣はしばらくの間尾を引いた。それは『対話』で報告されているように、二年後の1831年2月20日、ゲーテが自分の誤りを認めるまで続いた。だが、要約というエッカーマンの計画は失敗に終わった。『遍歴時代』の編集も1829年2月に行われた。その際エッカーマンは「マカーリエの文庫から」^{アルヒーフ}の箴言集を選び出さねばならなかつたが、ゲーテは彼の仕事ぶりに非常に満足だった。彼はこの数ヶ月、ほとんど毎日ゲーテの所にいた。二人は共にカーライルと文通し、手紙によって報告や意見交換も行った。

ある日のこと、特に注目すべき手紙がローマから届いた。それはルートヴィヒ・フォン・バイエルン王からの手紙で、慈悲深い言葉が記されていた。4月8日、ゲーテがこの手紙を読んで喜んだのは間違いない。ゲーテはエッカーマンに、その手紙が重要な意味を持っていることを説明した。

また二人は、新しいイギリス人達の到着を緊張の面持ちで待ち受けた。それはあたかも鉱泉治療医が最初の患者の到来を待ち受けるかようだった。というのも、二ヶ月前からイギリス人生

徒の受け入れが中断していたからである。『対話』に関する事、またそれをすぐに出版することに関しては、もはや何も漏れ聞こえて来ない。ハンヒェンとの手紙のやり取りもますます乏しくなっていた。

バイエルン王の慈悲深い手紙は、少々冒険的な新しい計画をゲーテの中に呼び起こした。エッカーマンを救済しようという計画である。ルートヴィヒ一世は畏敬される詩人でもあったが、ドイツ詩人の一人に俸給を与えようとしていた。1828年、プラーテン伯爵がこの支援を当てにしていたし、ハインリヒ・ハイネも1829/30年冬に出版された『ルッカの温泉』の中でこれに言及している。もしエッカーマンが王の愛顧を得られれば——二三年は助かるし、そうなれば『対話』の出版をそんなに急ぐこともなくなるだろう。タクトを振るい、巧みな外交術をもってすれば、多くのことは成し遂げられるものである。王は前年、宮廷画家シュティラーを特別にワイマルへ派遣して、ゲーテの肖像画を描かせていた。この絵の素晴らしさを歌で称えることが高貴な依頼主に忠誠を誓うことになるだろうし、このデリケートな課題をこなすだけの才能がエッカーマンにあるように思われた。だからゲーテはエッカーマンに、シュティラーの肖像画を題材にして、詩を一つ、またはいくつか書くよう強く勧めた。こう言われて少なくとも悪い気はしなかったもので、エッカーマンはこの提案に応じた。最初の詩（「この肖像画の前で」）を7月末には書き終えたが、それ以降、芸術の女神は執拗に彼を拒んだ。というのも、この夏はワイマルで過ごしてきた中で最も不運な時だったからである。彼は病気がちに塞ぎ込んで、「とてもやりきれない孤独」⁽¹¹⁹⁾の中を彷徨っていた。7月と8月の二ヶ月間、ゲーテとも距離を置いて引きこもった。7月8日に病欠届を提出した。私の精神は取り乱しているの、治療に本気で取り組まないといけないのです、と言って。些細なことでもいらいらした。彼は自分自身に責任を帰し、状況が変わってしまうことを心配した。友人知人との交際も避けた。午前中は個人授業をして、その後急いで戸外へ向かった。彼が足を向けたのは戸外の村々で、大抵はエッタースベルク山だった。本も一冊持って行った。旅館で休憩する時は、詩を書くためのインクと紙が必要だった。王への忠誠を表明する詩のことで胸が苦しかった。そのせいで余計に詩作は進捗しなかった。ただ、ゲーテとの文通は続いていた。ゲーテの誕生日にさえ彼は現れなかった。友人想いのソレのアドバイスもあって、ようやく30日にゲーテを訪問した。だが9月中は「夜みたい一人で閉じこもっているのは人間の友人ではない」⁽¹²⁰⁾と言ってゲーテが注意を促すまで、二週間もの間姿を現さなかった。比較的長い中断を挟んだものの、10月になって共同作業が再開した。ゲーテが自分の不在をどうやら軽々と乗り越え、差し迫って自分を呼びつけたわけではないことがエッカーマンの気分を悪くした。夏の間中彼を苦しめ、不安に駆り立て、人間嫌いにさせたもの——それはゲーテには明らかだった。日記のメモがそれを示唆している。10月25日、その日にエッカーマンと話し合ったことをゲーテは書き留めているが、それは次の言葉で締め括られている。「その他、思い出、信念、静養。」⁽¹²¹⁾

15. アウグステ

エッカーマンにとって1828年7月17日は、その後の人生を決定する重要な日である。その日の朝、これまでワイマル王女の教育係を務めていたエスペランス・ジルヴェスターがフランクフルトへ向けて旅立ったのだ。フランクフルトからイギリスへ向かう予定だった。彼女が去ってしまうことで、彼はワイマルで懇意にしていた数少ない人間の一人を失った。ジュネーブ出身の彼女から学んだおかげで流暢にフランス語が話せるようになり、また彼女はフランス文学やイギリス文学にも詳しくだったので、触発されることが多々あった。彼女とはすぐに親しい友人となり、晩になると雑談するのが常だった。

彼女の方でも、彼が来てくれて嬉しかった。というのも、彼と同じような気分を抱いていたからである。彼女には遠距離の恋人がいたのだが、既婚者であることが分かり別れていたのだった。彼女が「私達二人で一緒にイタリアへ行けたらいいのに——この小箱に入っている宝石を売りさえすればいいわけですし、旅費もありますわ！」という思いつきを述べて、別れの雰囲気明るくしようとしたのは、ひょっとしたら冗談以上のものだったかもしれない。エッカーマンがこのことを軽率にもフィアンセに漏らして驚愕させたのは、すでに述べた通りである。この夏の数ヶ月、彼はエスペランスがいなくてひどく寂しい思いをすることだろう。なぜならワイマルは物悲しい雰囲気に包まれていたからである。「カラフルなドレス、青いスカート、夏用の帽子、花飾りの付いた麦藁帽子、そういったものを身に付けている人はいません。全部黒色で、羊毛や縮緬素材の服を着た人ばかりです。」⁽¹²²⁾ ワイマルは喪中だった。カール・アウグスト大公が6月14日に急死したのだ。大公の未亡人は取り巻きと一緒に——ソレと皇太子が同行した——ヴィルヘルムスタールへ引っ込んでしまい、新しく大公となったカール・フリードリヒも MARIA・パウロヴナと一緒に春からずっとロシアにいて、今後戻って来るのが期待されていた。ゲーテもしばらくドルンブルクに逃げ出していた。日曜毎にゲーテの息子のアウグスト、またはオットーエが子供達を連れてドルンブルクを訪問していたが、エッカーマンもそれに同行した。イギリス人生徒は皆逃げ去っていた。ワイマルの死んだような静けさと退屈を避けたのだ。コンサートや演劇は秋になるまで考えられなかった。味気なく空虚な数週間は耐えがたいものとなるだろう！

17日午後、エッカーマンが人気のない通りを不機嫌に歩いていると、突然黒い人影が近づいて来た。宮廷劇場の若い女優の一人だった。彼はこの劇場の女優全員を知っていたし、女優達も彼のことを知っていた。だが目の前に立っていたのは、特にお気に入りの女優アウグステ・クラーツィヒだった。1825年10月以来彼女は舞台に立って、演技や歌や踊りを披露していた。彼はすでに二年間彼女の上達を目にしていて、静かな喜びを感じていた。観劇に熱を上げていたために、簡単には公演を見逃すことはなかった。本稽古にさえ足を運び、平土間席の中央に鎮座した。演劇学校の陽気な若者達は舞台上ですることがないので、見学することで演技の勉強をするのだが、

彼らに挟まれての見学だった。アウグステを知ってからというもの、劇場のロマンチックな薄暗闇の中で無邪気な逢瀬を重ねることは、ワイマルでの生活の心地よい習慣となった。劇場でアウグステは、友人達と一緒に彼の隣や前に座った。雀がさえずるように彼女は周りでくすくす笑ったり、ひそひそ話をして笑い声を上げた。時々彼女に何かを持参することもあった。林檎を持っていくとアウグステは平気で手づかみで食べたし、甘いものを持っていくこともあった。その後で二つ三つ離れた通りまで一緒に歩いた。エッカーマンは紳士を演じた。上品な女官達と一緒にいるより、若者達に交じってそうしていることの方がずっと心地よかった。

1828年の聖霊降臨祭には新しい衣服を着て、かなり贅沢な身なりをした。彼はハンヒェンに詳細な釈明を行っている。「新しい帽子二つ、ブーツ三足、ハンカチ八枚、青い燕尾服一着、青いコート一着、黒い生地ズボン一着、グレーの同じ生地ズボン一着、白い夏用のズボン二着」⁽¹²³⁾ — 12月には「良質の青いカルボナリ党のコート」⁽¹²⁴⁾ さえ付け加わった — 若い女優達はすぐに婦人へと成長し、悪質な野次に晒されて思いやりを失っていくが、そういった小娘達の批判的な眼差しに耐えるために彼はそうしたのであろうし、若くて陽気な集団の中で年寄りに見られなくなかったのだろう。アウグステが夕方の公演を終えて自分の責務を果たすと、公演終了後には公演者出入り口で彼女の帰りを待った。彼はまるで「劇団員」の一人であるかのようで、彼女の継母が傍らで少し怒ったように微笑んでも賛辞をいくつか述べた。ゲーテの後光が彼を包んでいたし、おまけにワイマルでは詩が日常語となっていたので、時折ちょっとした詩さえ握らせることもあった。その詩に認められた賞賛の言葉は彼女の気持ちを軽くし、褒められて頬が赤くなった。劇団員は囁き立てた。彼らはまだお互いの前で隠し事などしたりしなかった。だが、ベテランの同僚達は意味ありげに目配せして、口の悪い人が何人かあてこすりを言い始めた。

ワイマルは小都市で、異国趣味を抑制する空気があった。それは多くのイギリス人が、伯爵夫人や伯爵令嬢にさえ恋愛奉仕を強く要求したことに起因している。「あのエッカーマン博士は故郷にちゃんとしたフィアンセがいるのに、クラーツィヒ家のアウグステに首ったけなのよ！」この噂は鼠のように素早くゲーテのサロンにも伝わった。1827年8月、考古学者で書籍出版業を営むベルリン出身のバルタイがこのサロンで耳にしたのは、若い女優に入れ込んでいるエッカーマンを揶揄する言葉だった。ブレッケーデにいるフィアンセも、1826年夏に彼が訪問して以来、苦しい夢を見ていた。オーバールのオペラ『左官と鍵屋』の稽古に励んでいたこの年の5月、無責任な浮気が始まった。花婿はこのオペラについてハンヒェンに喜んで語っているが、その際、何の罪悪感も抱いていない。ずっと後になって彼が意識するようになったのは、16歳の少女への愛情が当時「極めて瑞々しく咲き誇り」⁽¹²⁵⁾ っていたということであり、また「彼女のそばで、いい思い付きがいくつか浮かび」⁽¹²⁶⁾ 元気づけられると、何とも言えない幸福を感じたということである。

初めて君を見てから五年が経った。
 なんと若かったことだろう！ 君はまだ成長段階にあった。
 ほとんど人目を引かなかったが、私の心には
 君の中にどれほど価値のある宝が隠されているか明らかだった。
 だが、すぐに見事に光り輝きながら
 君の豊かな才能が現れて、目と耳を魅了したのだ。
 君という魅力的な存在、君の心の輝き
 君の眼差し、君の微笑み、君の優美な踊り
 君の話し方に込められた心からの意味
 それらは聴衆全ての心を奪ってしまった。
 私はこの世にある喜びを感じた。
 以前からずっと自分で愛してきたものを見るという喜びを。⁽¹²⁷⁾

後にエッカーマンは物憂げに回顧しながら、愛の夜明けをこのように述べている。

あの1828年7月17日は、彼とアウグステにとって忘れられない日である。彼女は黒い服を着て彼の前に立っていた。目を赤くしていた。彼に手を差し出すと、涙が彼女の頬を伝った。喪服は亡くなった大公のためではなかった。二日前に父親が亡くなり、明日埋葬ということだった。エッカーマンも外科医をしていた善良なクラーツィヒと劇場や道路で話をするのがあったし、半年前には彼の治療を受けていた。患者想いの医者として——そしてアウグステの父として彼のことが好きだった。彼女を少しでも慰めようと、おそらく彼女にそう言ったことだろう。エッカーマンは何も予定がなかったので、彼女を家まで送った。彼女は叔母の所に住んでいた。というのも、継母とは折り合いが悪かったし、仕事のために休養することも必要だったからである。彼女の部屋は屋根裏にあった。だが今日は一人でいるのが怖かったのだ！ 少しだけ部屋に上がって行ってくれないかしら？ 彼女の部屋の窓からは、ワイマルを一望する素晴らしい眺めを目にすることができる。彼はおそらくこの招待に赤面して、誰も自分達を見ていないかどうか確認するために、隣家の窓をそっと盗み見たことだろう。彼は彼女の評判の良さを気にしていた。彼自身、「ワイマルの舞台に立つ一人の若い女優に寄す」という詩の中で、道に隠れて婦人を待ち伏せする不審者に注意するよう、彼女に促してさえいた。彼女はまだあどけない子供だった。だがこの時彼の目に留まったのは、この数年の間に立派に成長して、ほとんど自分の手に余るようになった彼女の姿だった。だがそうになると、尚のこと二人は路上に立ち止まっていられなくなった。だから彼は勇気を振り絞って先に進み、ギシギシと音の鳴る階段を登って行った。彼女の小部屋に着いて、密かな好奇心から辺りを見回すと、思わずメフィストの言葉が脳裏に浮かんだ。「こんなにきちんとしておく娘はそうざらにいない。」⁽¹²⁸⁾ それから緑色のソファーに座った。向かい合う

と、彼女はカラフルな真珠の縫い取りを手にした。何かせずにはいられなかったのだ。彼は言葉をかけ、静かにむせび泣く少女を少しでも慰めようとした。だが彼自身も胸が締め付けられる思いだった。二人きりで彼女の部屋にいるなんて！ この屋根裏部屋は全世界から隠されて、二人は感じ方も一致して、お互いを補い合っている。そう考えると、胸がどきどきして黙り込んでしまった。こうして二人は、しばらくの間向かい合って座った。

誰かがそばにいてくれて、彼女はただ嬉しかった。おしゃべりなど必要なかった。隣の台所から小さな仔猫が喉をゴロゴロさせながらやって来て、彼女の膝に飛び乗った。本が山積みになっていた。彼女は台詞を覚えておく役もなく、ドイツ語やフランス語の本を沢山読んでいた。だが、まだまだフランス語は苦手で、ワイマルの女子学校の授業を受けていても、彼女のフランス語はほとんど初歩段階だった。彼女はもっと勉強を続けたいと思っていた。例えばフランスの哲学者ラ・ブリュイエールを勉強していたのだが、ウィットに富んだ言葉の意味の背後へ正しく入り込んでいけないことが度々あった。エッカーマンはびっくりしてしまった。彼女はおそらくこのワイマルで唯一、17世紀の才気に満ちた道徳主義者を愛読する少女だったのだ。私でよろしければお教えしても構いませんか？ ええ、もちろんです！ そうしていただければとっても嬉しいですわ！ 明日になれば埋葬も済みますから！ — エッカーマンはその本を拾い読みした。あなたに喜んでいただけるなら、たまに小一時間ここに來ますから一緒に読んでみましょう。彼も特にラ・ブリュイエールが好きだった。彼女はソフォクレスさえ読んでいた！ 舞台上でちょっとした脇役を演じる彼女を見て — 誰が想像できただろう。そのお茶目なグレーの眼差しの奥に、こんなにも沢山の真剣さが隠されているのを！

二人は早速翌日から授業を始めることにした。エッカーマンは突如として、あらゆる女子生徒の中で最も魅力的な生徒に教えることになった。彼の情熱はすでに赤々と燃えていたが、この出来事によって二年前からこの娘に抱いていた想いが一気に高まって、煌々と燃え上がる炎と化したのだ！ 彼が早くも心配していたのは、彼女に自分の秘密を打ち明けることだった。少しばかり慌てた様子で彼が出て行ったので、彼女は善良な博士のことを少し奇異に感じた。彼はしばらくの間走って、通りや公園を駆け抜けて行ったが、大声で歓声を上げたい気分だった。それからしばらくすると、自分のことを年取った馬鹿者と罵って、ハンヒェンことを考えろと自分を戒めた。彼女は何と云ってくるだろうかと考えずにはいられなかった。だが彼女の顔を思い描くことはできなかった。あの若い女優の顔がそれと入れ替わってしまうのだ。自分のことが犯罪者に思えてならなかった。 — まもなく悲劇となってしまうのではないか！ 一体誰がこんなことを考えられるだろう！ ゲーテのエグモンは何と云っているだろう。「お前達は人生を糞真面目に受け取るのだろうが、そこに一体何があるというのだ！」⁽¹²⁹⁾ エッカーマンは人生をひたすら真面目に受け取ってきたが、心の中は乾ききって硬直していた。だが今、彼の心に小さな泉が湧き上がった。泉がさらさらと流れる音を言葉や詩で表現するために、皆ゲーテである必要はない。

紙に自分の気持ちを認め^{した}ることに、彼は昔から慣れていて、ダイnhalt小路にある静かな自室に戻って来ると、すぐに机に向かった。今日自分がどれほど優美な出来事に遭遇したかとか、この夏は予想以上に快適なものとなりそうだということを、旅立って行ったジルヴェスターの羽ペンで書き記した。だが、この手紙はあまりにも背信的な告白となるものだった。だから彼はそれを書き終えなかったし、文章をずっと短くして発送することもしなかった。それを一枚の日記として手元に取っておいた。彼は詩を書いた。可愛い四行詩である。それはこの日の持つ意味——認識と同時に決意を——を記録したものである。

部屋に入れてくれたということは、私のことを認めてくれたということだろうか？

この訪問は何とも魅力的だったし心地よかった！

私は君に愛を乞うには年を取りすぎている。

だが君を愛するには私は十分若いのだ。⁽¹³⁰⁾

エッカーマンは1828年7月17日という日付を詩の下に書き込んだ。ゲーテがそうするように強く勧めた習慣だった（1823年10月29日の対話を参照のこと）。それからは、これまで体験したこともなかったような一週間だった。詩が実際の彼の「状態」⁽¹³¹⁾を表す日記となった。ダンテたるエッカーマンは、アウグステの中にベアトリーチェを見出した。彼女の美しさ、精神、瞳を称える詩が一日に二つも出来る日もあったほどだ！ 彼女と勉強したりおしゃべりする時間は活力の源泉となった。1823年、マリーエンバートのゲーテでさえ「最後の恋」をエッカーマンほど大急ぎで追い回さなかったに違いない。エッカーマンの散歩コースはアウグステの所だったし、何も約束していない時であっても、飽くことなく市街地を通して彼女の所へ向かった。アウグステの方でも、彼が自分に心酔してくれて嬉しかったに違いない。彼女には少し気晴らしが必要だったし、野心的に彼から学ぼうとしていた。恋に夢中になった教師というものは、いつも最善を尽くすものである。また、こうしたちょっとした火遊びはぞくぞくするものだし、わくわくするものなのだ！ 自分に恍惚と熱を上げてくれて、彼女も嬉しくなかったはずはない。もちろん女優にとって賞賛と賛嘆は毎日食べる餌なのだが、この非凡な男性の隠そうともしない詩的な信奉は、途轍もなく誇らしいものだった。彼はそうした信奉によって生み出された紙を一枚一枚めくって、自分が書いた詩を彼女に見せた。彼がどういう状態にあるか彼女も分かっていた。差し当たり、隣人達が窓の覗き鏡の後ろから彼女のことを心配していた。またエッカーマン博士が来ているぞ！ 何を企んでいるのやら！

つまり俗物的な田舎町に覗かれていたということなのだ！ 一週間後には、エッカーマンは夏の別荘に滞在した。おそらく庭師のヘルツォークの所だろう。エッカーマンは「ヘルツォークの庭園」⁽¹³²⁾で素晴らしい数週間を過ごした——アウグステと一緒に！ 二日目の7月25日、彼女は

戸外で彼と会い、それから一緒に居間に行って腰を下ろした。フランス語の授業が終わり、家主の婦人と話している間、アウグステは庭で摘み取った花をスケッチした。薔薇や忘れな草であった。葉っぱはエッカーマンの紙挟みに入れた。乾いた花さえも。それは後々大切な思い出となるものだった。彼は二人の手紙のやり取りをアンドレスという名の少年に頼んでいたのだが、この少年が器用に手伝ってくれたおかげで、庭の林檎の木の下に弓の練習場を作ることができた。フランドル地方で従軍していた時にこの気高い技能を学んでからというもの、彼は弓術に熱を上げていたのである。彼は自分で弓を彫り出してさえいた。それは1825年5月1日の『対話』の中で詳しく述べられている。ゲーテはこの「変わり者」⁽¹³³⁾の専門知識に驚いて、家の庭のガラクタ置き場を引っ掻き回して「本物のバシュキール人の弓」⁽¹³⁴⁾を探し出し、エッカーマンと一緒に矢を射ることもあった。

アウグステがやって来ると、エッカーマンと競射をしなくてはならなかった。だが彼女の目は矢よりもひどく、いつもの的に当たらなかった。それから二人は水車用の水路に沿ってぶらぶら歩き、粉屋の大きなテーブルの後ろにある木製ベンチに腰掛けた。まるでかつての幼いペーターと行商人の父のようだった。二人は「おいしい濃厚な牛乳に砂糖とパン粉」をふりかけて、同じ容器を使って味わった。そこから見える広大な緑の芝生の上で、二人は子供のように追いかっこをして戯れた。

君は白いハンカチをわざともみくちゃにして

真ん丸のボールにした。

君がそれを私に投げってきたから投げ返した。

二人とも上手にキャッチした。

私達はこの極めて純粋な幸福を楽しんだ。

ボールは求めているかのように往復して飛んでいった

いつもボールは君の元に戻っていった。⁽¹³⁵⁾

二人はグルンシュテットまで散策することもあった。その地の庭師の所で、彼女の部屋を飾る花を買った。夕方、別れの時間になると「また明日ね！」が決まり文句となった。だがアウグステは、都合のつかない時や雨が降った時には、「敬愛する誠実な友人」の庭でなく自分の小部屋で会うことを提案した。「ワイマルの下衆な田舎者」に見られても構わなかった。エッカーマンの無邪気な心は、年齢の違いを消し去っているようである。彼がいてくれたおかげで彼女は喪期の数週間をやり過ごし、生きる勇気を新たに与えられた。そのことに彼女は心から感謝していた。あたかもこうした牧歌的情景がもう何年も続いて永遠に変わらないかのように、彼女は彼のことを信頼していた。彼の魂は彼女の魂と前世で出会っていたに違いない——さもなければ、彼はこの

世のものとは思えないこの調和を説明できなかった。彼女がいてくれたおかげで、彼は新しい生へ向けた詩的想像力に目覚めていった。これほど沢山の詩ができたことはこれまで一度もなかった。自身の『薔薇色の詩集』⁽¹³⁶⁾もアウグステのために構想された。7月17日の詩「A・Kに寄す」が冒頭を飾り、ほとんどゲーテのような美しいローマン字体でこの薔薇色の冊子に加えられた。この二つのアルファベットが何を意味しているか、注意深く読めば十分に分かるだろう。この冊子は何ヶ月も愛の使者として二人の間を往復した。

8月末に訪問客がやって来て、エッカーマンの夏の牧歌的生活は乱された。——こんな生活もいつかは終わりを迎えねばならないのだ。新しい大公がやって来て、ベルヴェデーレ宮殿に滞在していた。9月11日にはゲーテもドルンブルクから戻って来た。劇場ではリハーサルも再開された。日常生活への復帰は、ごく最近の過去の出来事を一層明るく輝かせた。以前と同じように観劇しても、今では二人の間には秘密の理解があった。アウグステの小部屋で授業をする時になって、ようやく二人きりになれた。

君のすぐ隣に腰掛けて

いつものように本を読む。

二人一緒になって本を覗き込むのは大きな喜びだ。

だがもっと大きな喜びはお互いに見つめ合うことだ。

君が分からない単語があると

私はできる限りの説明をする。

君は軽々とすぐに理解する。だがすぐに忘れてしまう。

お昼と同じくらい夕方本を読むのに時間がかかる。

いつも思い出すといつも嬉しくなることがある。

君の活発な精神に何度魅了されたことだろう！——

今もまだ口づけが私の内側に残っている

大好きなうなじに押し当てたあの口づけが。

晩も遅くになると眠気が君を襲う。

私の隣で安心しきって君は眠り込んでしまう。

君の静かな眼差しがどれほど私に元気を与えてくれることか

眠っていようと君の顔つきは美しく純粹だ！

隣の部屋で物音が聞こえる。

君の名をささやくとすぐに目を覚ます。

君はまた元気になって、いつもみたいに生き生きとなる。

そして優しく微笑みかけてくる、いつものように。

遅い時間になって、君は巻き毛をカールさせ始める。

すると私は近寄って、歡びに浸って君を見つめる。

それから君は上手に、そして淀みなく話し始める。

君と同じような女の子のことを。

夜、帰らないといけなくなると

君は壁に掛かっているコートを優しく手に取って

私を包んでくれる——そうしてくれて嬉しい——

別れる時には手も差し出してくれる。

通りに出て、暗闇の中を振り返り

明かりの点いた君の部屋を見上げる。

天空で永遠に星が輝くように

私は自分が味わった幸福を携えて行く。⁽¹³⁷⁾

たとえこの幸福が罪のないものであったとしても——エッカーマンはもう隠しておけなくなっていた。自分には十年前から忠誠を誓っている女性がいることを。だが抗しがたい力に駆り立てられたために、感情と理性に苛まれながらその人と離れて暮らしていることを。そして若さの持つ魅力のすべてを行使して、アウグステが自分を魅了してやまないことを。さらにアウグステの存在がもう若くないハノーファーのハンヒェンを消し去ってしまったことを。こうした心の動揺から正気に返るために、9月24日、彼はゴータへ出かけた。自分の心の内をはっきりとさせるには一日で十分だった。彼はこの危険から逃れようとはしなかった。この危険の中で命を落とさないだけの強さが、自分にはあると思っていたのだ。アウグステとの心地よい冒険のおかげで、彼の生命力や精神力は力強く目覚めていった。血管に新しい青春が脈打つのが分かった。ゲーテはこうした変化を何度も経験していた。1828年3月11日、ゲーテはエッカーマンに次のような言葉を述べている。「繰り返される青春」⁽¹³⁸⁾という言葉である。普通の人には一回しか与えられていないが、天才的な人物には青春は繰り返し授けられる、というのである。この夏と秋に書いたものは、以前のものよりも良い出来であると感じた。こうした判断は間違いなく、自分が書いた詩

のことを指してのことである。1818年から21年のハンヒェンに寄せた詩は、感情の温かさという点でアウグステに寄せた詩には到底及ばない。彼はその他の点でも生き生きと仕事をした。雑誌にもあれこれと文章を書いた。P・A・ヴォルフの追悼文、演劇報告、さらに批評文さえ寄稿した。またコッタの『モルゲンブラット』用に、アウグステと一緒にラ・ブリュイエールの断片を翻訳した。11月20日、「最近良いものが書いてとても嬉しい」⁽¹³⁹⁾とフィアンセに報告している。だが書いたものを彼は何も見せられなかったし、この時期に書いた詩のことはとてもではないが言い出せなかった。ただ理由は分からないが、8月にはその詩に関する噂はブレッケーデにまで伝わっていた。彼は少し不安だった。『ゲーテとの対話』の中で、1828年に書かれていることは特に多いというわけではない。だが、その21ある対話の中の11を下らない対話が10月のものであり、その生き生きとした多様性が際立っている。

この上もなく幸せなアウグステとの交際はこうして続いていき、二人をますます緊密に結び付けていった。エッカーマンの考えることは彼女のことばかりで、注意散漫を仲間に揶揄われた。「エッカーマンは放っておきなさい」⁽¹⁴⁰⁾とゲーテが宥めた。事情に詳しい人によると、「劇場にいる時以外いつもぼんやりしている」⁽¹⁴¹⁾ということだった。その場にいる人は、この周知の秘密に真面目に取り合わなかった。

だがエッカーマンは自分の力を過大評価していた。彼女に講読の授業をしている時、ダンテのフランチェスカ・ダ・リミニの物語にあるような、あの瞬間がついに訪れたのだ。「この夕べには二人は続きを読まなかった。」⁽¹⁴²⁾もし彼がすぐに体を引き離さなければ、すっかりこの少女の虜になっていたところだ！ だが、そうになってしまうと困るのだ！ 11月14日、彼女に手紙を書いた。その手紙は彼女がとっくに感じ取っていたことを知らせる内容だった。また同時にそれは、無理矢理感情を抑えながら自分が下した決定を告白するものだった。「昨日からずっと私達の関係について冷静に考えていましたが、二度と会わない方が二人にとってよいことだと思います。(…)この頃少しどうかしていました。どうかお許し下さい！ いろんな考えがいつべんに押し寄せてきて、心が乱れていたのです。それで自分を制御できずにいました。幸福をひと思いに諦めて、たとえ束の間であろうと、私達に与えられたものと喜んで錯覚し慣れ親しんでいた幸福を、こうして心から追いやってしまうのは、決して容易なことではありませんでした。あなたも分かって下さるでしょう。(…)あなたが私に許して下さったこの気高く純粋な関係には、いささかも恥じることはありません。また一瞬も後悔することはありません。これからもこうあることを望みます。私はまた自由になり、はっきりと決心できて幸せです。」⁽¹⁴³⁾

さらに彼は、この手紙に返事をくれたら嬉しい、もしだめならあなたの心に従ってほしい、と付け加えた。手紙の返事をエッカーマンは受け取った。二人の親密で個人的交際は完全には中断されなかった。これ以降、二人の間で夥しい手紙のやり取りが活発になされるようになった。こうして、この恋愛小説の第二章が始まるのである。

16. 愛の煉獄

アウグステへの愛を抑え込んで、程よい友情へと移し替えてしまおう、そうエッカーマンは大真面目に考えていた。最初の六週間はあえてほとんど外出せず、偶然にも彼女に会わないようにした。ゲーテでさえほったらかしにした。だが、アウグステの姿を鮮やかに思い出してしまい、彼女を街で探す誘惑に逆らえなかった。二人の磁石のような関係にまだ磁力があれば、彼は喜んだことだろう。そういった磁力はすでに——ゲーテという前例もあった！——実証済みだったからである。要するに、彼は彼女に会ってほしいと頼んだのである。「あなたの声の優しい響きが私の耳に届くのを、もう一度体験してみたいのです。」⁽¹⁴⁴⁾ こうして二人は劇場か、あるいは路上で時折話し合うようになった。だがいつも表面的で、大抵は他人行儀な話し方であった。そんな時、彼は混乱してしまい、一言も言葉が出てこなかった。そうなるとうすうす沢山の手紙で埋め合わせせずにはいられなかった。なぜなら彼は「善良な守護神」⁽¹⁴⁵⁾ という立場から彼女のことを考えていたからである。音楽監督のエーバーヴァインに頼んで、彼女が歌のレッスンを受けられるようにしてもらった。彼は舞台の出来について批評し、彼女が受けた喝采を大袈裟に喜んだ。役の中でフランス語を明瞭に正しく話すと、彼の喜びは二倍になった。少しでも手柄があるとすれば、それは自分の授業のおかげだと言ってよいからである。ようやくワイマルでも『ファウスト』の稽古が始まったが、彼女がグレートヒエンを演じられるか、彼は興味津々だった。それは彼女も全く同じだった。1829年1月、ゲーテは彼と配役について話し合った。ラ・ロッシュがメフィストに打ってつけだが、ファウストは誰にしたらよいだろう？ とりわけグレートヒエンは誰がいいだろう？ 突然ゲーテがこう言い出した。「クラーツィヒが女優としての教育を十分に受けていないのはとても残念だね。奇麗で背丈もあるし若いからね。グレートヒエンにぴったりなのに！」⁽¹⁴⁶⁾

「そうですね」とエッカーマンは答えた。「とても残念です！」⁽¹⁴⁷⁾ それから彼は一言もしゃべらなかつた。恋人の名前を言葉にしないと心に決めていたからである。

「滅多にお目にかかれないのは」とゲーテが続けた。「若い女の子の中に芸術的な感覚が開花して、その芸術的な厳肅さが人々に影響を及ぼすということです。私は何年も劇場に通いましたが、そういった女性はたった一人しかいませんでした。彼女は高貴なものを生命力あるものに変わってしまい、皆、彼女の演技に魅了されてしまいました。彼女こそオイフロジューネです。あなたも御存知でしょう。少なくとも私の詩の中で見たことがあるはずです。」⁽¹⁴⁸⁾ 夭折した女優クリスティーネ・ノイマンのことは、ゲーテの悲歌「オイフロジューネ」で語り継がれている。

ゲーテとオイフロジューネ——エッカーマンとアウグステ——どんなことでも二人はパラレルなのだ！ 「ゲーテがこう言うのは、あなたを念頭に置いているからです。私に許されていたあなたとの関係も、ここには少し仄めかされています。ゲーテも私達の間を知らなかったわけでは

ありませんから。』⁽¹⁴⁹⁾ すぐにエッカーマンはアウグステにこのように伝え、グレートヒェンを勉強するよう勧めた。仮に「これまで書かれてきた中で最も輝かしい」⁽¹⁵⁰⁾ この役を掴み損ねたとしても勉強する価値はあります、もちろんあなたがすでにこの役に必要な「芸術的な完璧さ」⁽¹⁵¹⁾ を持っていることは別の話ですが、と言って。彼女の人生がグレートヒェンに非常に似ているなどと、とてもではないが口にできなかった。ともかく一度このことを将来のメフィストと話してはどうか！ つまりね、多分ラ・ロッシュ自身がそれを望んでいるのだよ。私以上にね。ゲーテ以上かもしれない。彼女は野心的な女優だったので、もちろんこの役をどうしても手に入れたかった。2月3日、舞台終了後に継母同席の上でエッカーマンと「面会」した。だが、どうやら彼ははっきりとは彼女の味方をしなかったようである。それが彼女には少し不満だった。彼女は質問攻めにした。どうすればグレートヒェンに見えますか、何を着ないといけませんか、牢獄の場面の最初に歌われる荒々しい歌は私には全く理解できません。エッカーマンはすぐに彼女のためにレッチュとドラクロワのファウストのイラストを調達した。それから地下牢のグレートヒェンの歌について、分かりやすく模範的な説明を行った。当時、彼自身も『ファウスト』の舞台装置に取り組んでいた。だが演出家のデュランは、すでに折り紙付きとなっていたブラウンシュヴァイクの編集に頼り、ワイマルの宮廷の要求に従った演出を作り上げていた。リーマーが手伝ったが、ゲーテは消極的にしか関与しなかった。アウグステはグレートヒェンを演じられなかった。だからエッカーマンには、上演そのものがどうでもよいものとなった。

エッカーマンは絶えず恋人の心配をしていた。彼が特に熱心に取り組んだのが、彼女へのフランス語の授業である。フランス語の勉強を彼女はおろそかにしてはいけなかった。というのも、フランス文学は「毎日、より重要度を増して」⁽¹⁵²⁾ いったからである。だがその一方で、彼女にゲーテ作品に親しんでもらうよう努めた。「オイフロジューネ」を通じて、彼女はゲーテの詩にも関心を持つようになっていたので、さらに『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』や彼が改作に協力した『遍歴時代』、それに『親和力』を読むよう勧めた。これらの本は二人の間を往復した。夏休みの間読むように執拗に勧めたのは、ゲーテ＝シラー往復書簡であった。それは精神的に交際することの最高の模範であり、そういったものを彼女と育んでいきたいと思っていたからである。読んでいる時に「よい考え」が浮かんだらそれを書き記し、彼女本来の心から湧き上がってくることを「正直に嘘偽りなく」報告するよう指示した。彼はそのすべてに返事をするつもりだった。だが彼が望んだような「才気に満ちたキャッチボール」⁽¹⁵³⁾ は実現しなかった。将来作家になる素地が彼女にあるとすっかり信じ込んでいたとしても、そして実際に短編小説を後になって書いたのだが、彼は恋人視線で彼女の手紙を読んでいたのだった。彼女の手紙に書かれていることは才気に富むものではなかったし、特に重要なことも書かれていなかった。彼は彼女に全幅の信頼を寄せていた。だからワイマルに滞在し始めたばかりの頃の日記や、1823年のハンヒェン宛の手紙さえ見せた。初めてラ・ロッシュと知り合いになった時の文章を読むのも「おそらく嫌

ではない」⁽¹⁵⁴⁾ だろう、とエッカーマンは考えた。——おそらく彼女は興味津々に読んだことだろう！「薔薇色の本」のために彼は新しく詩を書いたが、うまく書けたものは、すぐに彼女は読まねばならなかった。詩を作るためには「ある種の情熱」⁽¹⁵⁵⁾ が必要だが、今では自分が詩人として頭一つ分成長していると感じていたとしても、彼は彼女に感謝しなければならなかった。彼はおそらくアウグステのために有名になりたかったのだ。「この人は私の友人なんですよ！」⁽¹⁵⁶⁾ と彼女に言ってもらえるように。花婿の自責の念さえ彼女に打ち明けた。1月、ハンヒェンは彼に「自分の髪で編んだ指輪」⁽¹⁵⁷⁾ を送っていた。彼女は5月にハノーファーで会うのを楽しみにしていた。だが彼は会えないことを詫びた。彼女は腹を立てた。彼はアウグステに次のように告白している。「確かに彼女のことはすっかり忘れていましたが、とても愛おしい人なので、私の胸一杯の愛が再び目覚めてきます。まるで彼女を目にしているようです。ですが——少し恐れています。」⁽¹⁵⁸⁾ フィアンセに会わなかった三年間、私は沢山の間違いを犯し、沢山の苦しみを味わいました。今もまだ間違いを犯し、苦しんでいます。そう彼は付け加えた。

この往復書簡が秘密裏になされていたために、彼とアウグステの関係は一層親密さを増していった。彼女が素っ気ない返事をするると彼はひどく落ち込んで、少し拗ねてしまうこともあった。だがそんな時には、彼女はこうお願いした。「寛大に振舞ってほしいものですわ、親愛なる博士さん！ 頂いたお手紙に私がちゃんとしたお返事を出すまで、どうしてあなたは待ってくれないのですか？ あなたが私の立場ならそう思うはずです。」これにどうやって反論できただろう！ 1829年6月15日、彼女は不平を漏らした。彼が自分を「無視」していて、そのことを同僚が奇異に感じている、と言って。「あなたが私の友人であることを、誰かが罰したいとでも思っているのですか？ 私のことが恥ずかしいのですか？」また彼女は次のように書き記している。あなたは「解明しようとするにがんばっても」ますます複雑になっていく謎みたいです。最近私は悲しくなって遺言状を書きました。私のささやかな所有物の中の最も愛おしくて貴重なものを、あなたにあげることにしました。私の日記です。そこには私が最も秘密にしておきたい考えや、まだ誰にも打ち明けたことのないことが書かれています。彼は18日にこう返事をしている。「あなたがようやくいつもの調子で私に接してくれて嬉しいです。あなたは最初から私のものです。あなたを離しはしません。離そうとしてもできないでしょう。あなたは私の精神の一部なのです。昼も夜もあなたのことを考えているので、あなたは私と完全に結合してしまっています。もし私があなたを避けていたのなら、あなたが考えているのとは全く別の理由があったからです。私は悲嘆に暮れていました。皆の前で幸せであろうとしても、希望が持てずにいたのです！それが理由でしたし、今もそうです。今も尚、この年齢であなたの友人として毎日交友関係を続けられることで、よく自分を慰めています。私達は年を取っていきますが、精神や心は若いままです。」⁽¹⁵⁹⁾

先頃アウグステは彼に、もう長いことヘルツォークの庭に行っていないのですか、と尋ねた。何という危険な思い出だろう！ 6月末、彼女はノラという小村を訪れていた。あなたも一度行っ

てみたらいかがですか、とはずばり言わなかったが、彼はその意図を読み取ってこう答えた。「ワイマル以外であなたにばったり会ってしまうようなことがあれば、私の散歩はあなたの近くにまで及ぶに決まっています。」⁽¹⁶⁰⁾ 彼はこの時、彼女の同僚ラ・ロッシュのことが念頭にあった。ですが、もしあなたがどこかへ行ってしまうのであれば、もう一度あなたの部屋にお邪魔します。ですから部屋を空けたままにしておいて下さい。また、書いたり読んだりできるように、紙と本を何冊か置いておいて下さい。6月26日、アウグステの小部屋を訪問した。彼女の叔母が上まで案内してくれて、その後一人取り残された。恋人の手書きの書き置きが彼を出迎えた。壁には彼女の肖像画が掛けてあった。前年、シュメラーが描いたものだった。少ししか似ていなかったが、彼女が身近に感じられた。仔猫も媚びるように近寄って来た。彼女が毎日使っているものが周りにあった。戸棚には本がきちんと並べてあった。彼は机に向かい、彼女に宛てて手紙を書いた。「あなたは読んでいるのですね！ 今も読んでいるのですね！ この胸一杯の想いに浸っていられたら！ 一週間ここに座って、ただ壁だけを見ていられたら。そうすれば十分に考えを巡らして感じる事ができたでしょう。あの日々のことを忘れはしません。ここにいることが許された日々を、多忙だった日々を、少なくともハンヒェンことを口にしなかった日々を。ここにいなくなってからもう数ヶ月、いや半年も過ぎてしまいました。通りに人はいませんし、階段も鍵が掛けられていません。この小部屋は昔と同じように私を迎え入れてくれます。ですが、私は幸福になるのを避けたのでした。あたかも自分には信念などないかのように、私はただ遠くからあなたに近づいて行きました。あなたを知り、ここにある物すべてが私を取り囲み、花や家具や戸棚が語りかけてくるようになるにつれて、ますますはっきりとしてきたことがあります。私達の精神的本質は互いに親しい関係にあるのです。私達が自覚し、勝手に言い聞かせている以上の親しさが、二人の関係にはあるのです！」⁽¹⁶¹⁾

ヴェルターの記事に出てくるような感動的な書簡詩を、彼は全身全霊を込めて書いた。羽ペンを下に置き、しばらくの間じっとソファーに座った。薄暗くなってきたので、お手伝いの女の子が蠟燭の明かりを持ってきた。鏡の前には忘れな草の花籠が置いてあって、そこから花をいくつか取り出した。彼の目の前にはヘルツォークの庭が広がっていた。弓術の標的を設置した、あの「ほとんど昔と変わらない」⁽¹⁶²⁾ 庭が。

アウグステの部屋にいます、これまで抑圧し克服したと思っていたものが、彼の中にまざまざと蘇ってきた。彼女に憧れる気持ちが強すぎて、彼は憔悴しきっていた。しかし、彼女が7月初旬に再びワイマルへ帰って来た時も、彼には彼女と会う勇気はなかった。

昼、外出すると、君の姿に取り囲まれてしまう。

夜、ベットに横になっても、それは色褪せることはない。

朝方、明るくなって、ようやく眠りにつく。

すると君は愛くるしい幻影となって私の前に現れてくる。
 君は優しい言葉をかけながら私の方を振り向いてくれた。
 近寄って君の手を取る。
 君は何と素晴らしいのだ！ 君の微笑みは何と穏やかなのだ！
 君を求める私の苦しみか、こんなにも甘美に癒されてしまうとは！——
 もう何も、もうこれ以上望みはしない。ただ
 夢を見続けて、君の近くにいられること以外は。⁽¹⁶³⁾

ハンヒェンを裏切っているという罪悪感と、アウグステを求める情熱的な欲望の間に立たされて、彼は憔悴しきっていた。精神的にも肉体的にも破綻した状態だった。彼は友人との交際を避け、世捨て人になった。人間嫌いの変わり者になったのだ。落ち着きなくワイマル近郊をさまよって歩いた。バイエルン王に献呈する詩のために、ゲータから「精神活動という点」に着目するよう言われていたが、それももうまくいかなかった。うっとりするほど幸せな時間を過ごしたことを思い返して、不幸な夏の毎日を過ごしていたからである。「明日の朝、友人のジルヴェスターが旅立って一年になります」と7月16日にアウグステに書いている。「四時間前にはあなたの所にいました。小部屋の窓から、私の視線は街を飛び越えて東の方へと向き、エッタースベルク山の麓の平野を越えて、西の方へ向かいました。今、色々な場所からあなたのいる方を見ても、そんな景色は広がっていません。そうです、あれは素敵な時間でした。まるで何度でも聴いていたい童話のようでした。」18日の夕方、孤独な散策から帰宅すると、アウグステからの手紙と彼女が作った財布が目に入った。財布を作ってくれたことに感謝して、彼は次のような詩を^{したた}認めた。

真珠をきれいに編み込んだ指
 その上を丹念に覗き込んだ眼差し
 それらが熱心に技巧を凝らして成し遂げたものは何だろう？
 一人の幸福な男を作り上げたのです。⁽¹⁶⁴⁾

アウグステも彼と同じく、あの意義深い一日（1828年7月17日のこと）のことを考えていた。あの日のことを思い返して、彼は少し元気になった。こうした気分のうちにルートヴィヒ王の詩を少なくとも一つ完成させたが、それ以降は疲れてしまったようで、自分の才能のなさにすっかり絶望してしまった。自分に手を差し伸べ、かつてシラーがゲータに書いたような「詩へと、自分を追い込んで」ほしい、そうアウグステに哀願した。だがそれも駄目だった。彼女が詩を書くことに少しでも喜びを感じていさえすれば、彼の文学の泉も新たに湧き出てくるに違いないのだが。冬の始まりとともに、頻繁に劇場やリハーサルで彼女と会うようになった。彼女と話をする

という「幸福を断念する」⁽¹⁶⁵⁾ 一方、彼女の夢を見るのが彼の生きる糧となった。手紙がますます情熱的に彼女に語りかけるようになった。手紙を思い切って送ってしまう前に、彼はよく何日もの間それを持ち歩いた。彼にとってボロボロになってしまった彼女のハンカチは、ファウストで言えば、愛の歓びの靴下止めだった。以前、彼女にハンカチを贈っていたのだが、彼女がそれを長いこと持っている、彼は返してほしいと頼んだことがあった。

1829年のクリスマスイブを、二人は悲痛な思いを抱いて過ごしていた。アウグステは家で一人ぼっちだった。クリスマスツリーに飾り付けをしたが、明かりを灯すこともせず、泣き疲れて眠り込んでいた。「なぜそうしていたのか、私に尋ねて下さらないのですね」と他日、彼に書いている。「どうしようもなかったのです。自分でも分かりません。」彼は絵を一枚とゲーテの手稿をプレゼントした。彼が驚いたのは、アウグステの筆跡がゲーテの筆記と似ていて、だからこそ彼自身の筆跡にもますます似てきていることだった。何週間も前から宵の明星が一際明るい光を放ちながら空に輝いていた。この星とともに、彼の愛は以前よりも力を増して、新しい力を取り戻していった。星々は彼に微笑みかけていた。アウグステの父親の霊でさえ二人に味方した。彼は宇宙的関連性の中に身を委ね、「宵の明星よりも高い所に浮遊する悪魔」⁽¹⁶⁶⁾ に導かれているかのようにだった。だが彼は愛の楽園ではなく、苦しみと諦念の煉獄を潜り抜けることになる。彼に待ち受けていたのは、希望や願望のない次の未来であった。というのも、彼と恋人の間を仕切る壁以上のものが立ち塞がっていたからである。彼女は「とても熱しやすく冷めやすい」⁽¹⁶⁷⁾ 人だった。彼女はともかく女優なのであって、役に扮することが職業だった。「あなたが絶えず二つの役を演じ、それどころか私を嫌っているようにさえ思えます」と彼は彼女に書いている。「私の愛が果てしないものでなければ、私の愛はとっくに死んでいたことでしょう。」⁽¹⁶⁸⁾ あの「薔薇色の本」には、「仮面を取ってほしい！」という戒めの非難を含む詩が収められている。

今日は、きちんとした身なりのネクタイ姿のフェーンドリヒ
 昨日は、太った鶯鳥の羽をむしっている田舎娘
 明日は、宮廷の煌めきの中で台所仕事をする下女
 その次の日は、君がどんなガラクタに囲まれているか分かるはずない！
 いつも違った仮面を付け、いつも違った化粧をしている。
 君の肖像画を見ていると、私は完全に参ってしまう。
 どんな仮面を付けていても、君は魅力的で奇麗だ。——
 だがアウグステとして、もう一度私と会ってほしい！——
 どんなに奇麗に着飾って化粧しても
 君本来の姿が、すべてを明るく照らし出してくれるからだ。⁽¹⁶⁹⁾

あなたに対する自分本来の感情を失わないために、私に対して率直で正直であってほしい、そう彼は何度も彼女にお願いした。というのも、彼女は絶えず本来の自分を隠していたからである。彼女が隠し事をしていると彼は確信していた。それは長い間、彼が薄々感じていたことだった。それがどんなに辛いことであっても、ただ彼女からそれを知りたかった。だが、このあからさまな告白に対して、彼女は勇気を奮い起こすことができなかつた。彼自身がそのことを1830年3月23日の日記で書いている。散歩から帰って来ると、彼は劇場で俳優のラ・ロッシュと出会った。ラ・ロッシュは彼の友人で——彼よりも幸せなライバルだった。彼は落ち着いて、だが情け容赦ない諦めの気持ちを込めて次のように書いている。「私達はそれぞれ自分の時計を見ました。時計の針は一秒たがわずぴったりと合っていました。思うに、時計は私達の心を映し出していたのです。私達の心の針は同じ対象に向かっていた。どうしてそうなったのか、最終的な結末が何か悲劇的なものになろうとしているのではないか、そう私は驚きの気持ちで一杯でした。私がイタリアに行って不在にすれば、さっそく何か成熟していくのでしょうか。帰って来た時に聞きたくも知りたくもないことを聞き知ってしまうのを、正直、私は恐れています。要するに、女性が男性を仲違いさせるのです。女性は人生のあらゆる災いの原因です。もし女性がいなければ、男性は世間というものに気付かないでしょうし、未発達の子葉のように、そのまま成長していくでしょう。」⁽¹⁷⁰⁾

この愛の煉獄から、たった一つでも奇跡が起これば救いはあるし、こうした奇跡が起こってほしい、そうエッカーマンは願っていた。こうした思いを抱いて、彼はイタリアへと旅立って行くのである。

本稿はH. H. Houben: *Goethes Eckermann. Die Lebensgeschichte eines bescheidenen Menschen*. Berlin / Wien / Leipzig (Paul Zsolnay) 1934の第10章から第16章までを訳出したものである。第9章までは以下を参照のこと。

林久博：「翻訳：H. H. ホウベン『ゲーテのエッカーマン——ある控え目な人間の伝記』(3)」、『文化科学研究』第32巻 通巻第53号、中京大学文化科学研究所、2021年、81～93頁

注：

- (1) Goethe: *Werke*. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. IV. Abtheilung. 38. Band. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1906, S. 154. (Reprint: Sansyusya 1975) [Brief an C. F. v. Reinhard (2. 6. 1824)]
- (2) Ebd., S. 185. [Brief an C. F. v. Reinhard (5. 7. 1824)]
- (3) Houben, Heinrich Hubert: *J. P. Eckermann. Sein Leben für Goethe. Teil 1. Nach seinen neu aufgefundenen Tagebüchern und Briefen dargestellt*. Hildesheim (Dr. H. A. Gerstenberg) 1975, S. 139.
- (4) Tewes, Friedrich (Hrsg.): *Aus Goethes Lebenskreise. J. P. Eckermanns Nachlaß*. 1. Band. Berlin (Georg Reimer) 1905, S. 37. [Brief an Johanne Bertram (13. 8. 1824)]

- (5) Goethe, IV. Abtheilung. 38. Band, S. 186. [Brief an C. F. v. Reinhard (5. 7. 1824)]
- (6) Tewes, S. 240. [Brief an Ernst Große (7. 8. 1823)]
- (7) Houben, S. 202.
- (8) Goethe: *Werke*. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. III. Abtheilung. 9. Band. Weimar (Hermann Böhlhaus Nachfolger) 1897, S. 301. (Reprint: Sansyusya 1975) [Tagebuch: 28. 11. 1824]
- (9) Tewes, S. 169. [Brief an Heinrich Stieglitz (4. 12. 1824)]
- (10) Goethe, III. Abtheilung. 9. Band, S. 270. [Tagebuch: 19. 9. 1824]
- (11) Ebd., S. 281. [Tagebuch: 13. 10. 1824]
- (12) Ebd., S. 264. [Tagebuch: 4. 9. 1824]
- (13) Eckermann, Johann Peter: *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens 1823–1832*. Berlin (Deutscher Klassiker Verlag) 2011, S. 126.
- (14) Ebd., S. 127.
- (15) Ebd., S. 128.
- (16) Ebd.
- (17) Ebd.
- (18) Ebd.
- (19) Goethe, III. Abtheilung. 9. Band, S. 303. [Tagebuch: 3. 12. 1824]
- (20) Eckermann: *Gespräche mit Goethe*, S. 129.
- (21) Ebd.
- (22) Goethe: *Werke*. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. III. Abtheilung. 10. Band. Weimar (Hermann Böhlhaus Nachfolger) 1899, S. 18. (Reprint: Sansyusya 1975) [Tagebuch: 13. 2. 1825]
- (23) Tewes, S. 37. [Brief an Johanne Bertram (13. 2. 1825)]
- (24) Ebd., S. 38.
- (25) Goethe, III. Abtheilung. 10. Band, S. 24. [Tagebuch: 28. 2. 1825]
- (26) Tewes, S. 39. [Brief an Johanne Bertram (27. 3. 1825)]
- (27) Ebd., S. 40.
- (28) Ebd.
- (29) Ebd.
- (30) Ebd., S. 41.
- (31) Goethe, III. Abtheilung. 10. Band, S. 39. [Tagebuch: 4. 4. 1825]
- (32) Ebd., S. 59. [Tagebuch: 24. 5. 1825]
- (33) Ebd., S. 63. [Tagebuch: 2. 6. 1825]
- (34) Tewes, S. 48. [Brief an Johanne Bertram (18. 8. 1825)]
- (35) Ebd., S. 49.
- (36) Ebd., S. 47.
- (37) Ebd., S. 51. [Brief an Johanne Bertram (8. 9. 1825)]
- (38) Ebd.
- (39) Ebd., S. 49. [Brief an Johanne Bertram (18. 8. 1825)]
- (40) Goethe, III. Abtheilung. 9. Band, S. 173. [Tagebuch: 1. 2. 1824]
- (41) Houben, S. 221.
- (42) Tewes, S. 53. [Brief an Johanne Bertram (10. 11. 1825)]
- (43) Ebd., S. 54. [Brief an Johanne Bertram (2. 12. 1825)]
- (44) Ebd., S. 53. [Brief an Johanne Bertram (10. 11. 1825)]
- (45) Ebd.
- (46) Goethe: *Werke*. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. III. Abtheilung. 11. Band. Weimar (Hermann Böhlhaus Nachfolger) 1900, S. 23. (Reprint: Sansyusya 1975) [Tagebuch: 18. 2. 1827]
- (47) Eckermann: *Gespräche mit Goethe*, S. 47.
- (48) Goethe, III. Abtheilung. 10. Band, S. 277. [Tagebuch: 6. 12. 1826]
- (49) Burkhardt, Carl August Hugo (Hrsg.): *Goethes Unterhaltungen mit dem Kanzler Friedrich v. Müller*. Stuttgart (Cotta) 1870, S. 142.

- [[https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=uc1.\\$b261231&view=image&seq=158](https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=uc1.$b261231&view=image&seq=158)]
- (50) Tewes, S. 59. [Brief an Wilhelm Bertram (26. 5. 1826)]
- (51) Houben, S. 251.
- (52) Ebd.
- (53) Ebd.
- (54) Tewes, S. 69. [Brief an Johanne Bertram (2. 3. 1827)]
- (55) Ebd., S. 70.
- (56) Ebd., S. 68. [Brief an Johanne Bertram (5. 2. 1827)]
- (57) Ebd.
- (58) Ebd., S. 61. [Brief an Johanne Bertram (20. 7. 1826)]
- (59) Ebd., S. 62.
- (60) Ebd.
- (61) Houben, S. 270.
- (62) Tewes, S. 64. [Brief an Johanne Bertram (18. 9. 1826)]
- (63) Ebd.
- (64) Houben, S. 271.
- (65) Ebd.
- (66) Tewes, S. 66. [Brief an Johanne Bertram (18. 12. 1826)]
- (67) Houben, S. 271f.
- (68) Tewes, S. 63. [Brief an Johanne Bertram (18. 9. 1826)]
- (69) Goethe, III. Abtheilung. 11. Band, S. 114. [Tagebuch: 24. 9. 1827]
- (70) Ebd., S. 80. [Tagebuch: 5. 7. 1827]
- (71) Ebd., S. 96. [Tagebuch: 12. 8. 1827]
- (72) Ebd., S. 129. [Tagebuch: 28. 10. 1827]
- (73) Tewes, S. 73. [Brief an Johanne Bertram (31. 5. 1827)]
- (74) Ebd.
- (75) Ebd.
- (76) Houben, S. 278.
- (77) Ebd., S. 284ff.
- (78) Schiller, Friedrich: *Die Jungfrau von Orleans*. In: *Werke in drei Bänden*. Band III. München / Wien (Carl Hanser) 1966, S. 427.
- (79) Goethe, Johann Wolfgang: *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. In: *Werke*. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Band VIII. Hrsg. von Erich Trunz. München (C. H. Beck) 1994, S. 141.
- (80) Tewes, S. 353. [Brief an Johanne Bertram (21. 10. 1827)]
- (81) Ebd., S. 354.
- (82) Ebd.
- (83) Ebd., S. 356.
- (84) Ebd.
- (85) Ebd.
- (86) Ebd.
- (87) Ebd.
- (88) Ebd., S. 355.
- (89) Ebd.
- (90) Ebd.
- (91) Goethe, III. Abtheilung. 11. Band, S. 181. [Tagebuch: 20. 2. 1828]
- (92) Tewes, S. 78.
- (93) Ebd.
- (94) Ebd., S. 81.
- (95) Ebd., S. 82.
- (96) Ebd.

- (97) Goethe, III. Abtheilung. 11. Band, S. 218. [Tagebuch: 13. 5. 1828]
- (98) Ebd., S. 203. [Tagebuch: 9. 4. 1828]
- (99) Ebd., S. 205. [Tagebuch: 13. 4. 1828]
- (100) Ebd., S. 200. [Tagebuch: 2. 4. 1828]
- (101) Houben, S. 228.
- (102) Tewes, S. 89.
- (103) Ebd., S. 86.
- (104) Ebd., S. 87.
- (105) Ebd.
- (106) Ebd.
- (107) Ebd.
- (108) Ebd.
- (109) Ebd.
- (110) Ebd., S. 88.
- (111) Ebd.
- (112) Ebd.
- (113) Ebd., S. 89.
- (114) Ebd.
- (115) Ebd., S. 88.
- (116) 「1829年1月6日」と原文に記されているが、当該引用は「1828年1月6日」である。Goethe, III. Abtheilung. 11. Band, S. 160. [Tagebuch: 6. 1. 1828]
- (117) Goethe: *Werke*. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. III. Abtheilung. 12. Band. Weimar (Hermann Böhlhaus Nachfolger) 1901, S. 39. (Reprint: Sansyusya 1975)[Tagebuch: 16. 3. 1829]
- (118) Ebd., S. 25. [Tagebuch: 18. 2. 1829]
- (119) Tewes, S. 92 [Brief an Johanne Bertram (25. 8. 1829)]
- (120) Goethe: *Werke*. Hrsg. im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. IV. Abtheilung. 46. Band. Weimar (Hermann Böhlhaus Nachfolger) 1908, S. 82f. (Reprint: Sansyusya 1975)[Brief an Eckermann (19. 9. 1829)]
- (121) Goethe, III. Abtheilung. 12. Band, S. 144. [Tagebuch: 25. 10. 1829]
- (122) Tewes, S. 84. [Brief an Johanne Bertram (28. 6. 1828)]
- (123) Ebd., S. 83. [Brief an Johanne Bertram (4. 4. 1828)]
- (124) Ebd., S. 90. [Brief an Johanne Bertram (20. 11. 1828)]
- (125) Houben, S. 552.
- (126) Ebd.
- (127) Eckermann, Johann Peter: *Gedichte*. Leipzig (Brockhaus) 1838, S. 261f.
[https://books.google.de/books?id=KfcKAQAAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false]
- (128) Goethe, Johann Wolfgang: *Faust*. In: *Werke*. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Band III. Hrsg. von Erich Trunz. München (C. H. Beck) 1996, S. 86. [V. 2686]
- (129) Goethe, Johann Wolfgang: *Egmont*. In: *Werke*. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Band IV. Hrsg. von Erich Trunz. München (C. H. Beck) 1994, S. 400.
- (130) Eckermann: *Gedichte* (1838), S. 104.
- (131) Eckermann: *Gespräche mit Goethe*, S. 64.
- (132) Petersen, Julius: (Hrsg.): Eckermanns Briefe an Auguste Kladzig. In: *Jahrbuch der Sammlung Kippenberg*. Band 4. Leipzig (Insel) 1924, S. 134. [Brief an Auguste Kladzig (26. 6. 1829)]
[<http://www.goethezeitportal.de/infocenter/goethemuseum/goethe-museum-duesseldorf/schaetze-aus-dem-goethemuseum/jahrbuch-kippenberg/band-4/band-4-blatt-067.html>]
- (133) Eckermann: *Gespräche mit Goethe*, S. 573.
- (134) Ebd.
- (135) Eckermann: *Gedichte* (1838), S. 129.
- (136) ここで言及される『薔薇色の詩集』に記されていたのは、エッカーマンの手書きによる26編の詩と、そ

のうち書かれることになっていた17編の詩の題名である。これは1838年の第二詩集の基礎となるものである。Vgl. Petersen, S. 180.

- (137) Eckermann: *Gedichte* (1838), S. 126.
- (138) Eckermann: *Gespräche mit Goethe*, S. 656.
- (139) Tewes, S. 89. [Brief an Johanne Bertram (20. 11. 1828)]
- (140) Eckermann: *Gespräche mit Goethe*, S. 289.
- (141) Ebd.
- (142) Dante: *Die göttliche Komödie*. Übersetzt von Hermann Gmelin. Stuttgart (Reclam) 1966, S. 27.
- (143) Petersen, S. 101f. [Brief an Auguste Kladzig (14. 11. 1828)]
- (144) Petersen, S. 105. [Brief an Auguste Kladzig (12. 12. 1828)]
- (145) Ebd., S. 106. [Brief an Auguste Kladzig (30. 12. 1828)]
- (146) Ebd., S. 109. [Brief an Auguste Kladzig (30. 1. 1829)]
- (147) Ebd.
- (148) Ebd.
- (149) Ebd.
- (150) Ebd.
- (151) Ebd., S.110.
- (152) Ebd., S. 129. [Brief an Auguste Kladzig (18. 6. 1829)]
- (153) Ebd., S. 126. [Brief an Auguste Kladzig (27. 4. 1829)]
- (154) Ebd., S. 121. [Brief an Auguste Kladzig (21. 4. 1829)]
- (155) Ebd., S. 116. [Brief an Auguste Kladzig (25. 3. 1829)]
- (156) Ebd., S. 130. [Brief an Auguste Kladzig (18. 6. 1829)]
- (157) Ebd., S. 110. [Brief an Auguste Kladzig (30. 1. 1829)]
- (158) Ebd., S. 122. [Brief an Auguste Kladzig (21. 4. 1829)]
- (159) Ebd., S. 128f. [Brief an Auguste Kladzig (18. 6. 1829)]
- (160) Ebd., S. 130.
- (161) Ebd., S. 132. [Brief an Auguste Kladzig (26. 6. 1829)]
- (162) Ebd., S. 134.
- (163) Eckermann: *Gedichte* (1838), S. 261.
- (164) Eckermann: *Gedichte* (1838), S. 139.
- (165) Petersen, S. 141. [Brief an Auguste Kladzig (21. 11. 1829)]
- (166) Houben, S. 455. [Eckermanns Tagebuch: 25. 1. 1830]
- (167) Ebd.
- (168) Petersen, S. 155. [Brief an Auguste Kladzig (1. 1. 1830)]
- (169) Eckermann: *Gedichte* (1838), S. 115.
- (170) Houben, S. 483f. [Eckermanns Tagebuch: 23. 3. 1830]